ハートフル、ファニーライフ

大月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハートフル、ファニーライフ

【Ｎコード】
Ｎ８７０４Ｉ

【作者名】
大月

【あらすじ】
俺こと永野冬真は高校２年生だ。今現在幼馴染と同じ高校に通いながら同じ家で一緒に住んでいる。どんな状況なんだ、となると、別に結婚しているわけでも恋人同士でもない。家族がどっかに行ってしまった俺の面倒を幼馴染の杉下葵には見てもらっているというだけだ。そんな俺は、蒼坂高校の２年生となったこの日からも、変な生活を続けていく……

プロローグ：変な生活の始まり

蒼坂高校に合格した俺、永野冬真。
今日は入学式であり、この日は俺の高校生活が始まるという、素晴らしい一日、のはずであった。まさか人生最悪の一日になるなどとは、このときの俺は考えもしていなかった。

何が人生最悪か？
ゴキブリが出ただとか、鳥の糞が直撃しただとか、そんな生易しいものじゃない。交通事故や、病気、それはそれで最悪だが、人生最悪というには少しばかり足りない。
何がおきたか、この日俺を最も祝福し、喜んでくれたであろう両親。そして、俺のことを支えてくれていた良い姉だった永野夏海。2人が家から姿を消したのはこの日だった。

リビングにやってきた俺の目の前には、一通の封筒。表に「冬真へ」と書かれているのだから俺が開けるしかない。

俺は封筒の中身を取り出した。
この日が俺の、実にふざけた生活が始まる最初の一歩だったわけだ。

「な、なんじゃこりゃ……」

これは封筒の中にはいっていた手紙を読み終えた俺の口から、自

然に漏れてきた感想である。読み終えてから5秒。俺の思考は止まり、その文章の意味を理解できなかった。

「……なんじゃ……こりゃ……」

同じ言葉が出たが、やはり文章の意味は理解できない。

もう一度手紙を確認する。

『冬真へ、今日から一人暮らしをしてもらう。私たちは遠くにいてもいつでも冬真のことを気にかけている。がんばってくれたまえ』

「なんじゃこりゃー！」

俺の両親はこの日、子供を育てるということを放棄した。俺も高校生になるわけで、もうガキではない。生きていけないというわけではないが……

まさか、まさか俺の人生の門出の日に親に捨てられるとは夢にも思わなかった。

手紙にはまだ続きがある。

『幼馴染の可愛い子、たしか葵ちゃんだったかな。彼女にお願いしてあるから』

この文章は１００回くらい読み返してみても意味を理解することは不可能だった。葵ちゃんというのは、幼馴染の杉下葵のことだろう。

家は少し離れているが、小学校からずっと同じだった。

家族ぐるみで仲がよく、昔からよく遊んでいたのだ。その葵に、一体何をお願いしたのだろう。

そしてこの短い手紙は、こう締めくくられていた。

『では、がんばってくれ。健闘を祈る』

捨てられた息子に対しての謝罪の言葉が見つからないのは、俺が未熟だからということにしておこう。

ちなみに姉からのメッセージはなし。姉の飛鳥までいない理由が分からないのだが、大方両親と一緒に出て行ったか、もう高校3年だから1人で暮らしているかもしれない。

「うーん、困ったなあ」

とりあえず、朝ごはん。と行きたいのだが、母さんがいないということで、俺は今から自分で朝食を作らないといけないようだ。

ただ俺にできる料理といえば、カップラーメンかカップ焼きそばかカップのうどんくらいなんだが……

俺があれこれ考えていると、キッチンから何か音が聞こえた。どうやらご飯が炊けたらしい。母さんは炊飯器のセットくらいはして出て行ってくれたのだろうか。

つか出て行くな。と言うのは無駄なようで、とにかく今日を生きることが先決だ。

俺がキッチンに向かうと、突然廊下を誰かが走る音が聞こえた。これにはさすがにビビッた。

「うおわっ！」

俺が変な声を上げてフローリングの上で尻餅をついていると、リ

ビングの扉を開けてよく知っている綺麗な女の子が、女の子とはいっても同い年なのだが、幼馴染の葵だった。

「あ、起きてたの？　おはよー」

「……は？」

俺の目覚めたはずの脳は、めまぐるしく変わるこの異常な現実にまた置いてけぼりを食らってしまう。手紙に書かれていたお願いというのは、こういうことなのか？

エプロン姿なのだが、これがまた似合っている。相変わらず綺麗だし可愛いのだが、さすがに見飽きた顔でもあるな。

「今日からよろしくね」

「……」

とりあえず受話器を持って、番号をプッシュする。迷わずに俺が押した番号は、連絡がつきそうも無い家族ではなく、朝っぱらから娘を俺の家に送り出しているアホな葵の家の番号だ。

数回の呼び出し音の後に、電話に出たのは何度も聞いた葵の父親の声だ。

『はい、杉下です』

「おい俺だ。なぜ葵がいる？」

『あー冬真くんか。おはよう』

「あぁおはよう。じゃねえよ！　何でいるんだよ！」

『聞いてないのか？』

「だいたい聞いてるけど、てめえも娘を簡単に送り出すなよ！
まさか俺と一緒に住むとかいうなよ……？」

『よろしく頼むぞ、なぁに花嫁修業みたいなもんだ』

あっはっは、と笑いやがるが、このおっさんは娘のことが心配ではないのだろうか。一つ屋根の下、大事な娘がこの俺と2人きりなんだぞ。

『大丈夫だ。冬真くんは葵には一切手を出さんだろう』

「出さねえけどさ」

『出さんのか……？』

若干残念そうなこのおっさんはやはりアホだ。うちの両親とあんまりやってること変わらないんじゃねぇのか？

「はぁーっ。変わんないな」

『信頼してるんだ。小学校から冬真くんのことはずぅーっと見てきてるからな』

「分かった分かった」

受話器を置いた。とりあえずこのおっさんはアホなんだが、確か

に俺は葵がどんなに無防備に寝ていても、襲ったりすることは無い。
確かに葵は綺麗だし、可愛い。それは俺が男である限りそう思うのは当然のことだ。しかし、葵はそれ以前に幼馴染だ。恋愛の対象としてはなぁ……

「冬真ーっ！　ごはんできたよ！」

「……はぁー」

「えっ？　なんか問題あった？」

「いや、ありがと」

なんと味噌汁だ。味噌汁が高校生の作れるものだという新事実は置いておいて、とにかく一口飲んでみる。
うん、うまい。普通にうまい。というかかなりうまい、なんだこりゃ。

「ずっと俺と暮らすの？」

「うん、よろしくね！」

何が嬉しいんだか知らないが、葵のテンションはかなり高い。笑顔もすごく輝いている。こんな顔を見るのはいつ以来だか……なんにしても何が嬉しいんだろう。
しかし変なことになってしまったなぁ……

こうして、家族離散から、俺の実に変な生活が始まることとなった。

第1話：一年記念、＋1

2年目。そろそろこの蒼坂高校というものにも慣れ始め、友達もでき、まぁ楽しくやっている。
始業式を昨日終えて、今日は新学年の2日目となる。とりあえず朝起きた俺は、洗面台で顔を洗って、リビングに向かった。

俺の家は現在、かなり特殊な家族形態をとっている。
家族構成は、俺と同居人のみ。ちなみにどちらも高校生で、しかも同じ蒼坂高校2年生、そして同じクラスだ。
リビングには、エプロン姿で俺を笑顔で迎える幼馴染の同居人。杉下葵がいる。俺はこの生活を1年間続けている。最初は高校生2人のくらしには、無理があると思っていたが、葵が家事全般簡単にこなしてしまうので、今ではたいした問題も無く毎日が過ぎて行っている。

「おはよー」

「おはよう」

リビングにはすでに朝食が用意されている。
1年間で、葵は何だが立派にお嫁さんという感じになっている。というかそん所そこらの母さんよりも母さんだ。間違いなくうちの母さんよりも母さんだろう。
料理はもともとうまかったが、今ではかなりのレベルの料理が作れるようになっている。とても1年間で上達するレベルでは無いように思うが、もともと器用なので何でもできてしまうのだろう。

とにかく朝食をいただく、のだが。

最近なんだか葵は俺の顔を無意味に眺めていることが多い。別に葵に見つめられている事に関して、俺は不愉快だとかは全く思わないのだが、俺なんかとの生活でこいつがおかしくなったんじゃないかと若干の不安も抱いている。

まぁ飯はうまい。大丈夫だろう。

「うん、うまい」

「良かった」

俺の一言で笑顔になる葵。本当に良い幼馴染だと思う。

これだけのことをしてくれているのに、葵は見返りの1つも求めていなかったし、文句の1つも言っていない。俺だったらやめて家で元の生活に戻る。

それか給料もらえるだろ。

「ねぇ冬真」

「なに？」

「あの日から1年経つね」

あの日。つまり葵が俺の家に来た日、そして俺の両親と姉がどっかに消えた日だ。正確にはまだ1年経ってはいないが、高校生活の始まりという意味では、そうかもしれない。

ただそれでも1年と1日経っている。

しかし重要なのはそこではないことくらいは俺でもわかる。

「まぁ、この日は来るだろうと思ってた」

「……？　そりゃそうだよね」

「何が望みだ？」

「？」

葵は頭の上に？を浮かべている。違ったのか？
1年経つからそろそろ見返りを求められても当然とは思っていたのだが。そもそも今までそれがなかったことにも、違和感は感じていた。
そんなことを考えていたのだが、ようやく葵の頭の中でもそこに行き着いたらしい。だがなぜか表情を曇らせてしまった。

「……冬真。何か思うことはない？」

「いや特には」

別に思うことも無いような気もするが、葵はなぜか俺から目をそらしてしまった。しかも「結構がんばってたのにな」とか呟いている。もちろんがんばってくれてたことは理解してるが。
とにかくこの状況は好ましくない。
何か幼馴染との関係修復の気が利く技があればいいのだが、俺にはそんなスキルは無い。

「じゃ、じゃあさ……今日別に用事もないし、学校終わったら遊びに行くか？」

「……」

「き、記念にさ」

ダメかと思ったが記念という言葉で葵は一気に笑顔にも戻った。
とりあえず一周年でパーッと遊びたかったという理解でいいのか、どうなのか。

「じゃあダチも呼んでパーッと「いらないわよ！」

なぜか怒られてしまった。しかも1年間でもなかなか見ることの無かったほどにお怒りの様子。どうも一周年をパーッと祝うという感じでもなかったらしい。
幼馴染だが、女子って分からないもんだな。とりあえず、記念に、俺と2人でということらしい。

「じゃあ2人でどっか行くか」

「うん！」

この一言でさっきとは真逆、この一年でもなかなか見れなかったほどの笑顔になる。表情にここまで出てるのに、イマイチ分からない。女心というやつか。

しかし感情の起伏が激しい。やっぱ疲れてるのだろうか。
……だから大勢は困るということか。なるほど、ようやく理解した。

「ね、冬真。私のこと……どう思ってる？」

唐突にこんなことを聞く。一年の間でも何回か聞かれたが、何も、俺の気持ちは変わらねぇよ。

「当然好きだ」

だって幼馴染だし、もう１０年以上の付き合いだしな。それに葵のことを嫌いになる男って、日本にほとんどいないんじゃないか？

ブス専かホモだろ。俺としては変な男に引っ掛けられないかが不安でしょうがない。美人だしな。

「私も」

この新婚ほやほやなやり取りもなんだかなぁ、とは思ったりするが、葵はそれで満足らしいし問題ないのだろう。

「ごちそうさま」

ちょこちょこと話しながらだったが、朝食を俺は食べ終わった。葵の朝食はまだ結構残っているが無理も無い、というかこれで計算が合う。

何の話かというと、まず俺はキングオブ平均値。つまり特徴が無い男と自他共に認めている。ちなみに男からの意見以外は参考としていない。しかし女子に聞いても同じだろう。

そんな俺に残された長所というのが、２．０という良い視力と、飯を食うのが早いということだ。どちらも学校の昼休みに行われる行事に役立っているが、それは今はどうでもいい。

大事なのは計算のほう。蒼坂高校で俺たち幼馴染と関係を持つ生徒はかなり多いが、俺と葵の同居関係を知っているのはごくごく少数の生徒だけ、というか２人だ。

ここまでごまかせたのは、葵の家が近所というほどでもないが遠

くないことと、こうやって行動時間を微妙にずらすという工夫があったからだ。

葵は俺と一緒にいるところを学校で見られることに関しては、むしろ積極的だったが、同居していることはばれないようにしようというのは、俺も葵も最初に共通で思ったことだ。

1年前に葵の親父に電話で言ったとおりに、俺と葵にはなにも起こらなかった。というか起こるはずもなかったのだが、同居しているという事実が知れればこの考えには誰だって至る。

やはりそれはよろしくないのだ。

「じゃあ俺先に行くわ」

「いってらっしゃ〜い」

葵に笑顔で見送られ家をでる。俺の家は住宅地の中でも、大きな道路からは離れた位置にあるので、この辺までやってくる生徒はいない。

不便な位置と思ったりもしていたが、何かを隠すには最適だった。

「お弁当持ったー？」

玄関から顔を出して葵が俺に確認する。もちろん弁当はしっかりかばんの中に入っている。俺は笑顔で持っていることを伝えた。

「やっ！　元気にしとるかね」

不意に後ろから声をかけられた。地声が高い男が、無理に年寄りみたいな声を出そうとした感じの声だ。俺に声をかけるのだから、

まさか学校の奴か？

「……拓海かよ。脅かすな、一体何してんだよ」

「あぁ、高校生らしい、節度ある健全なお付き合いについて考えていたら、ここにやってきていた」

「俺に言ってるのかそれ？」

残念だが的外れだ。

そう伝えるとこの男は盛大なため息をついた。何か意味ありげな行動だが、こいつはバカだから仕方が無い。きっと深い意味は無いか、拓海だけが分かる何かだろう。

先ほどこの同居という事実は、学校の人間には隠しているといったが、この男、佐山拓海にならば見られても問題は無い。

なぜならすでに知られているからだ。この事実を知っている人物のうちの1人は、この佐山拓海だ。

背が低く、声が高い。日本人離れした金髪が、日本人の顔となぜか絶妙にマッチしているという希少といえば希少な男だ。自称蒼坂ナンバーワンベビーフェイス。まぁ童顔という意味ではあってると思う。

まぁ本当ならば知られたくは無かったが、ばれてしまったものは仕方が無い。隠すことは無意味だ。

「はあー、まさか葵がストーキングされるとは思っても見なかったしなぁー」

こいつは葵の後をつけて来て、玄関から顔を出した俺に出会ってしまったのだ。

「昔のことは言いっこなしでしょ」

よく蒼坂のベビーフェイスと言えたものだ。俺と出会うなり大慌てで去っていったくせに。誤解を解くのに骨が折れたというものだ。

「まぁ昔のことは確かにいいや。せっかくだし一緒に学校行こうぜ」

「えぇー？　男と？」

「お前女子と通学したことあるのかよ」

「っ！　ちぇっ、これだから幸せな奴は……」

どうも無いらしい。幸せなやつというが、俺は今はそりゃ不幸だなんて思わないが、1年前家族に捨てられたようなものなんだぞ。

「なあ、冬真」

「なんだよ」

なぜか拓海の表情はいつもとは違い、真顔だった。これはきっと、ろくでもないことを言い出す前兆だ。

「葵ちゃんとキスとかした？」

「……」

こいつの中で誤解は結局解けていなかった。やはりあの時の「は

いはい、分かりました」は嘘偽りだったらしい。なんで分かんないかな。

「あのな、俺が葵とそんなことするわけ無いだろ」

「お前さー、それ本気？」

佐山拓海の持論。若い男女が同じ屋根の下2人でいれば、キスくらいは当然で、それはそれは淫らなことになる。否、ならなければおかしい。

そんなわけねぇだろ。幼馴染ってのは、もはや家族みたいなもんなんだよ。

「じゃあ聞くが、お前の母親がそりゃあもうやばく綺麗だったら襲うか？」

「襲う」

聞く相手を間違えたらしい。

「……悪いが、お前と分かり合える日は一生来ない」

「ていうか何で母親が出てくるわけ？」

「そういうものなんだよ葵は」

「うわぁー、お前絶対女泣かすタイプだ。正直俺、お前のこと嫌いかも知れねーわ」

久しぶりに会って、その言い草は酷いんじゃないだろうか。

「俺はミスター平均値。そして紳士だからな、泣かされても絶対泣かせねぇよ」

「無理」

「なんでお前に否定されなきゃならないんだよ」

「セリフの最後のフレーズはちょっとカッコいいのがはら立つ。もう、全校生徒の男子の望みだから、お前死んでくれ」

「ちょっとそれは酷いだろ……」

「酷くねぇ！」

なぜか怒り出した拓海は、1人で学校までの道を走り出してしまった。

めんどくさいから追いかけないけど、結局1人で登校かよ。まぁいつもこうだし別にいいけど。

というか……

俺って嫌われてるのか？

なんか心の中に1つ、大きな不安が生まれてしまった。

第2話：新クラス、結構知ってる顔が……

俺と葵は、行動時間をずらすことによって同居しているという事実を隠している。

だが時間をずらすことによって、葵が遅刻するわけにはいかないので、俺の登校する時間は少し早い。

そもそも感覚が違うのだ。俺としては遅刻ギリギリで良い派なんだが、葵はやっぱり余裕を持った計画を立てる人間だ。

1年のときは、俺の教室に入るくらいの時間帯には、4分の1にも満たない人数しかいなかった。

だが今日は2年生最初の授業。クラスも変わっているため、投降時間が早い生徒が集まっているかもしれない。

まあ生徒が集まるまでの20分足らずの時間のことだからどうでもいいのだが。

俺のクラスはFクラス。AからFの中のFクラスだ。別に成績最悪の生徒が集まってるわけでもない。

とりあえず教室の戸を開けた。

すると、俺の目に、物理的に何かが突っ込んできた。

「イテェ！　なぜ新クラスでいきなりこんな仕打ちを……！」

まさか、拓海の言うとおり俺は嫌われていて、男子生徒による俺への攻撃なのか。

考えていたのだが、思考は中断させられる。

なぜか突然の無重力体験。視覚が奪われているため、何が起こっているのか理解できない。俺は情けない声を上げて、地面に叩きつけられた。

「いってー……一体何が」

「おはよう、永野君」

「て、てめぇか柊……」

柊沙羅。朝っぱらから俺に目潰しからの投げ技を叩き込んでくれた、ろくでもない女の名前だ。

去年も同じクラスだったのだが、また同じクラスで1年過ごすと思うと目眩がする。

とんでもなくガサツな女、というわけでもない。成績優秀で、スポーツ万能。言葉遣いも丁寧で、いちいち動作が華麗で男子からの人気がすさまじい、まさに文武両道才色兼備。

ガサツなのにここまでパーフェクトなのが、実に腹立たしい。

「この程度の攻撃、かわしてくれないと」

「かわせるかっ」

まだ腰が痛い。こいつは中学まで柔道部だったらしく、聞いた話では中学女子の部全国準優勝だとか。

こいつに勝った奴はどんなマウンテンゴリラだったことか。想像するだけでも怖い怖い。

「私が認めた男なのに」

「認めてもいらねぇよ」

視界も復活し、腰の痛みも引いてきたが、気分はそれなりに最悪だ。

そんな俺の様子を見て、なぜか。いや、前の1年で分かったことがある、こいつはドSだ。きっと腰を抑える俺を見て喜んでいるに違いない。

満足そうに微笑むと、腰まである長い黒髪を揺らしながら向きを変えて、自分の席に戻った。

まさか俺への襲撃のために構えてたのか？

「と、冬真……お前、葵ちゃんがいながら……別の女とイチャイチャしやがって！」

「なっ！　拓海、お前いたのかよ。つーかいたなら見てただろうが！　なんでそうなる」

バカな拓海は怒っていた。つーか葵ちゃんがいながらって、あいつただの幼馴染だから。

「うるせー密着しやがって！」

「理不尽だろ！　こっちは視界奪われて投げられてんだぞ！」

俺が拓海に文句を言い終えるのと同時に、どこからか何かがすごい速さで飛んできた。

空を切りそれは、俺の頬をかすめていった。

「彫刻刀じゃねぇか！　洒落にならねーぞ」

俺の頬からは、一筋血が流れていた。なんかひりひりする。

「きっとそいつらは暗部だ」

「なんだそれ」

「柊様に近づく虫を暗殺する特別部隊だ」

「こわっ」

つまりここの連中は、好きな女子のために男友達なら容赦なく殺しちまうのか。

「気をつけるんだね」

「一応お前は心配してくれるのか……」

「葵ちゃんをガサツに扱った日の夜には、戸締りをしっかりすることだね」

こいつやる気だ、俺の寝首をとる気満々だ。

一瞬でもやっぱりこいつは親友とか思った俺が間違っていた。

「じゃあとりあえず柊に言ってくるよ」

「なにを？」

「いや俺に近づくなって」

柊の席に向かおうとしたら、おれのわき腹に拓海の足が撃ち込まれてた。
無駄に体鍛えやがって、めちゃくちゃ痛いじゃねえか。
「何しやがる」
「お前こそなんてこと言おうとしてやがる」
命が惜しいから、柊との距離をとろうとしているだけじゃないか。
「言ってることめちゃくちゃだろ。理不尽だ」
「いや、お前の存在自体が罪なんだから死を受け入れろ」
この学校に俺の友達っていないの？　というか拓海は何で怒ってるんだ？
わけが分からない。何で俺は朝から目潰し、投げ技。そして彫刻等による攻撃、最後には拓海の中段蹴り。俺の高校生活は苦痛に満ちている。なぜ？
もしかして本当に俺が悪いのだろうか。
「おはよーっ」
殺伐としていた空気をまとめて吹っ飛ばして教室にやってきたのは、幼馴染の葵だ。朝も普通に会っているが、そのことは基本的に秘密だから、今日初めて会った感じで挨拶しておく。
葵がやってくる時間は、登校してくる丁度良い時間帯だ。ここか

ら教室にはぞろぞろと生徒が集まってくる。
何人か固まって入ってきた生徒の中に、ものすごく目立っている生徒が1人。去年もクラスが同じだった男だ。

「おっ。武蔵じゃん」

拓海もすぐにその存在に気づき声をかけた。その生徒の名前は宮木武蔵。何か足りない男だ。
初めて名前を見たときに、おしいっと心の中で思ってしまった。
会ってみるとさらに惜しいのだ、なぜなら。

「拓海殿、冬真殿。お久しぶりにござる」

しゃべり方がそれっぽいのだ。しかも長い髪を後ろで1つにくくって、その髪型もなんかそれっぽい。
顔つきも声もそれっぽく。10人に9人が高校生だと見抜けないだろう。

銃刀法違反という法律の廃止と、今一度侍の世を、と常々言っている。絶対にどっちも無理だと思うが聞きゃしない。
つまりただの歴史オタクだ。
好きなものを聞いてみれば剣と妹とメイドさん。つまりただのオタクだ。

「お前、その侍語で話すのやめろよ」

「良いではないか、これが自然なのだ」

むちゃくちゃめんどくさい男だ。

「むっ、そろそろ始業時間にござるな」

武蔵に言われて時計を見ると、確かに始業の時間が近い。席に着くとしよう、と思うのだが俺の席はどこにある？

「そうだねー。あと、お前の席ならあれ」

拓海が指差した席は、窓側の一番後ろ。授業をサボるにはもってこいの場所だ。

静かで快適で言うことなしだな。

席に座って、とりあえずせっかくの窓際。眺めを楽しんでみることにした。

……中庭だ。そして向こう側の校舎が見える。

「あっ、冬真。席となりだね」

となりは葵だった。とりあえず拓海じゃなくてほっとした。

「となりが葵かー」

「えっ？　嫌かな……」

「いや全然」

嫌なはずが無い。むしろ俺としては葵でよかったとさえ思っているのに。

「後ろは私よ永野君」

後ろには柊がいた。なぜかシャーペンをまるでダーツの矢のように構えて不敵な笑みを浮かべているが、あんたはシャーペンで何をする気だ。
あとあんたが後ろなのは結構嫌だ。何されるか分かったもんじゃない。

「楽しい1年になりそうね」

「そうだねっ」

柊にしてはまともな発言。そしてそれに笑顔で同意する葵。葵は普段からこうだが、柊もこんな風に普通の高校生っぽい会話をしてればいいのに。

「存分にいじめてあげる……」

なんか背筋がゾクッとした。
とりあえず、最初のホームルームは席替えで決定だな。

「担任の先生だれかなあ」

「さあ？　担任なんか別に誰でもいいけどな」

葵の何気ない質問に俺の思うことを言う。もちろんこのときも背後への注意は怠らない。
そんな俺の様子に気づいているようで、柊は相変わらずの綺麗な笑顔で「なにもしないわよ」と言っている。あんたの笑顔には騙されないぞ。
その笑顔は楽しんでいる顔だ。

「でも恐い先生とかだったら嫌じゃない？」
「そんな恐い先生なんていたっけ？」
もちろん背後は注意する。
柊は相変わらずの笑顔で俺を見ながら「そんなに私が気になる？」などと言っている。
「冬真……沙羅ちゃんがそんなに気になる？」
「え？　まあ気になるといえば気になるが」
だって気にしてないと、何がおきるか分からない。
「冬真……」
「なんだ？　ってどうした？　なんか元気なくなってねえか？」
なんか分からないけどうつむいてしまっている。これって俺のせいなのか？
それとも俺の後ろで相変わらず余裕の笑顔の柊のせいなのか？
「あまり、エッチな目で見ないでほしいわ」
恥らう、フリをしている。
というかセリフだけで相変わらず笑っているだけだ。手で胸を隠すようなことはしてるけど。
「見てねえ。……どうした葵」

「なんでもない……」

なんでそんな元気がなくなってんだ？

ほんともう先生来てくれないかな。

第3話：三つ巴、悪魔と女の子とハムスター（前書き）

ちょっと無理がある、気がしてならないです。

第3話：三つ巴、悪魔と女の子とハムスター

俺の切なる願いが通じたのか、担任は教室に入ってきた。
顔なじみのある教師だ。去年も俺のクラスの担任をしていた菅原先生。ギリギリ２０代、まあ俺の予想なんだがそれくらいの歳の女性教師だ。

教室に入るなり、俺の顔を見て肩をすくめる。そして入り口付近の席の拓海を遅れて発見し、盛大なため息をついた。自分のクラスの生徒くらい確認してから来てるだろうが、いまさらそんな反応やめろよ。

「不本意ながら持ち上がりで、またこの学年を受け持つ菅原だ。俺の顔を見るのはもう勘弁という輩もいるだろうが、こっちのセリフだ」

いきなり俺たちを輩扱い。しかもこの男勝りというか、男言葉。相変わらずだ、彼氏なんぞできるはずも無い。

「時に柊。俺はこのクラスの生徒を確認したときに、できるだけ授業に近いものになるようにと考えて席順を決めたのだが、お前はその本来席の無い場所にいる。戻れ」

「お言葉ですが先生。元の席でも授業に近いものにはならないと思います」

今思えば、突如俺の席は１つ前に進んだのかと思ったりもしたが、柊のいる位置は不自然だ。まあはみ出していることはいいことだ。危険人物だから。

柊の、菅原先生の決めた席順を否定する発言に、先生は少し怒り気味に聞いた。

「なぜだ？」

「佐山君から半径５メートルの範囲に女生徒を配置すべきではないです」

「それどういう意味ですか！？」

佐山が立ち上がり抗議する。確かにそれは酷い、３メートルくらいが妥当だろう。

「バカが移るわ」

「それ男でも一緒じゃねえか」

「男は最初からおバカなのよ……」

ねぇ、と俺に同意を求める柊。なぜ俺だ、俺がバカだとでも言いたげな顔だな。

先生はこのやり取りに、納得したわけでもないが、どうもめんどくさくなったらしい。頭をかきながら、少し考えた後に、提案した。

「席替えやるか？」

俺としては大歓迎だ。

「では席順は私が決めますね」

「勝手にしろ」

先生は教卓にもたれかかって、めんどくさそうに教員手帳を開く。きっと問題生徒、柊、と書き込んだに違いない。

というかこれ完全に柊ペースじゃないか。

……私が決めますね？

「ちょっと待て、お前どうするつもりだ」

「……私が信用できない？」

「できな……」

言い終わる前にカッターナイフが俺の目の前を通過して行った。

朝一の彫刻刀といい、暗部の連中の沸点がイマイチ掴めねえ。

「……永野君、私のことなんだと思ってるの？」

鬼か悪魔の類、下手をすれば死神とかいう設定が隠れてるんじゃないかと思ったりもしているが、これを口にすると日本刀くらいなら飛んできそうなので笑ってごまかす。

「別に心配しなくても、ちゃんとみんなが納得できるようにするわよ」

異様な説得力、しかし騙されてはいけない、のだがこれ以上下手に動くと死にかねない。

「ちょっと沙羅ちゃん」

身動きの取れない俺に代わって、さっきまで下を向いていた葵が動き出した。

いいぞいいぞ葵。がんばれ葵。

「私も手伝うよ」

「……」

無言でなぜか俺を見る柊。せめて葵を見ろ。

「まぁ、いいわ」

俺を見たまま葵に返事をする柊。別にいいけど、話すときは話す相手の目を見るもんだ。

「あ、あの……」

ここで新たなる生徒か介入してくる。どうも皆さん席順が気になってしょうがないようだ。

まあ新学年スタートから、なじむまでの高校生活、席順はかなり重要といえるな。

「私も、お手伝いします」

そういって俺の隣、というよりは柊と向き合える位置まで歩いてきたのは、またまた俺の元クラスメイトだ。まあ今年も一緒なんだが、去年も一緒だったってことだ。

彼女の名前は岬優那。ショートヘアで赤っぽい髪の色。去年で俺が持った印象は、おとなしいということに尽きる。
目が若干たれ目で、余計にそう感じさせる。去年もクラスが違い、今年も違うようだが、こいつには双子の姉が同じ学校にいる。性格と髪型と目の形以外はそっくりな姉妹だ。

俺の顔を見ると、軽く頭を下げて挨拶してくる。和むねえ、こういう子は。

その様子を見て何を感じ取ったか、柊の口角がいつも以上に上がっているように見える。
笑顔という表現でいいだろうけど、邪悪だ。

「いいわよ」

柊は簡単に了承した。
何か企んでいるわけでもないのか。

「まず永野君はここね」

柊は俺の席に教室の真ん中を指定した。何でまたそんな場所に。

俺の不満を感じ取ったのか、柊が釘を刺す。

「バカに拒否権は無いわ」

拒否しないと俺がバカみたいだから、拒否したいところだけど、どのみち俺の意見がとおりそうも無い。

「俺の席は？」

拓海がニコニコ笑顔でやってきた。とりあえずこぶしをぶち込みたくなったが、ここは抑えておこう。　拓海の顔を見て、柊は笑顔で天井を指差した。

「逝ってきなさい」

どうやら天井じゃなくて天国だったようだ。

拓海は不服そうだ。そりゃそうだよな。ほぼ直球で死ねって言われただけだし。

「私はここがいい」

葵が指定したのは、俺の席の隣だ。まあ葵なら横にいてくれると、結構助かることもあるかもしれない。俺としては大歓迎なんだが……

「いいわよ、それで」

柊は予想外にも１つ返事でＯＫだった。

しかし、ここでおとなしかったはずの優那ちゃんが一歩出た。

「わ、わたしもそこがいいですっ」

なんとも予想外の発言だ。

このやり取りを柊は楽しそうに、拓海は恨めしそうに見ていたが、これだったら俺が退いたらいいんじゃねえか？

思い立ったらすぐ言ってみることとしよう。

「じゃあ俺別の場所でいいから、２人で並べばいいじゃん」

「「え？」」

なぜか２人は目をパチクリさせて、俺のほうを見ている。そして柊は珍しく声を上げて笑っている。

これってナイスな提案じゃなかった？

「い、いや……別にそこまでこの場所じゃなくてもいいかな」

と、優那ちゃん。でも指定した場所を俺のためにあきらめてもらうなんて悪い。だって俺この場所に執着無いどころか、どっちかというと嫌だし。

「いいって、気にするな。２人で座ってたらいいから」

「いや、だからさあ」

葵まで。２人がその場所がいいなら俺は全然そんな席に執着無いというのに。

というかさっきからずっと、声は収まっているが笑顔でいる柊は、何が面白いんだろう。

拓海はさっきからなぜか動きが無い。

騒がしいの代名詞、佐山拓海らしくもない。

「なあ、どうすればいいと思う」

そんな拓海に現状打開策を求めてみた。

「お前が死ねばいいよ」

「なっ、今日お前酷くねえか？」

やはり俺は嫌われているのか。去年もなぜかどさくさにまぎれて闇討ちされそうになったり、周りの男どもがおかしくなったりすることはあったが、ここまでストレートなのは無かったぞ。

なんか気づかないうちに、葵と優那ちゃんの間にも不穏な空気が流れ始めている。

譲り合いから喧嘩にでもなったのか。全く親切というか良い子過ぎるだろ。俺が譲るといっているのに。

「葵も優那ちゃんもさ、俺どっちかというとそこ嫌だから。2人で座ってよ」

「えっ？　……そうなの」

「……永野君、嫌……ですか」

余計に空気が悪くなったような、これはどうもまずい状況だと、俺の第6感が教えてくる。

この際柊でもいいから笑っていないで助けてほしい。

「彼もきっと本心ではないわ」

そんな俺に助け舟を出してくれたのは、やはり柊。いや柊様。

鬼？　悪魔？　死神？　そうではなく間違いなく彼女は天使だ。

今だけな。

「まあ、冬真だしね」

「そうです……永野君ですしね」

空気が軽くなった。それはいいんだが、その理解はどうかと思う。あと、教室の真ん中だなんて位置は、心のそこから好ましくないと思っているんだが。

「期待通りに面白かったわ。私は満足したし、席替えしましょうか」

柊は、クラス全体に呼びかけた。その手には、即席で作ったと見られるくじがあった。

ずっと笑いながらせっせと作っていたのか？　なんか気持ち悪いな。まあ仕事が速いのは認めるところだけど。

しかし流石は柊というのが、その一言でクラスの生徒全員が、指示通りに動いて席替えが進むのだ。

「永野君。席、どこですか？」

優那ちゃんが俺に聞く。俺の席は、一番廊下側の列の、真ん中の位置。まあ悪くない位置だ。

ただそのことを伝えると、優那ちゃんは肩を落として「そうですか……」と、なんだか落ち込んでしまった。

「冬真の席そこ？」

葵が俺の座ろうとしている席を指差して聞く。うなずくと、ちょっと微妙な顔になって、教室の真ん中の、先ほどまで座りたがって

いた席に着いた。
いいじゃないか、座りたかった席に座れて。何がいけないんだろう。

柊の席は俺の席とは真逆。一番窓側の列だ。
とりあえず俺の落ち着いた高校生活2年目は保障――

「あ。冬真そこ？　へへ、俺となりじゃん」

――されなかった。
とりあえず言っておく。最悪だ。

第４話：禁断の……

キーンコーンカーンコーン。これは俺の心の声だが、本日最後の授業の終わりを告げるベルが鳴った。

午後からの授業で、寝ているところ以外を見ることがなかった、佐山拓海という男の成績とか諸々心配に思ったりもしたが、俺も似たようなものなので、まず自分を心配すべきだ。

しかし授業に臨む姿勢が変わらないのに、点数はかなり俺が上。

「神の悪戯か、拓海がアホか……」

「あまりに突然で分け分かんないけど、結構失礼なこと考えてたよね」

多分後者。こいつはアホだと思う。

「久しぶりの授業は疲れたね」

拓海はだるそうにするが、騙されてはいけない。こいつはほとんど寝ていたため、多分目覚めスッキリ、もしくはまだ眠いだけで、決して勉強で疲れていることはない。

「その顔で言うか」

頬は押さえられて赤くなり、うっすらよだれの跡がある。誰が見ても寝起きの顔だ。

「細かいことは言いっこなしなしだよ。そんなことより、今日帰りどっかで遊んでかない？」

「あー……悪いがパス」

放課後は葵と約束がある。1年記念だとかで、わざわざ俺と2人きりという指定付き。

まああまり人がいても疲れるからな。

「んだよ付き合い悪いなあ。お前、葵ちゃんとデートとかじゃないだろうな」

「よく分かったなあ」

うっかり感心してしまったが、失言だったかもしれない。

なぜそう思ったかというと、拓海の目がものすごい見開かれているからだ。眼球飛び出しそうで恐い。

「俺と葵ちゃん、どっちが大事なの」

「葵が１０００倍大事だ」

「聞くまでもなかった」

分かっていたなら聞くなよ。

「デートはいいけど、あれだよ？　ちゃんと学生らしい健全なお付き合いをだねえ」

「うるせえ、日本一卑猥な高校生」

「なに言ってるの、俺は超健全だよ。誰かとちがって女子と2人

きりで遊んだことなんて無いし」

「お前それ負けてねえか？」

「誰にさ」

「男として、全てに」

「……うう……」

「悪かったって」

泣くことないだろ。俺は女子と遊んだことは……まあある。つか今日もだけど。

というか、これは拓海を調子に乗らせるから絶対言わないけど、こいつ普通に顔は良いんだよな。平均の結構上をいっているはずだ。金髪が似合う、アジアの顔で、女顔、ベビーフェイス。なんでもてないかは言うまでもない。拓海だから。

アバウトだが、的を得ていると思う。

「ぼ、ボクわ……どうすれば……」

急に弱弱しくなった。演技か、本気で凹んでるのか分からないけど、俺は何を言うべきか。

「まあ、諦めがついたら男にでも乗り換えれば」

「いやだよっ！」

何を思ったか俺の顔をガン見。葵ならまだしも、こいつの場合は若干不愉快だ。
それに気持ち悪い。
「その気のところ悪いが……俺にその趣味は……」
「違あああう！　断じて違う！」
「いや、否定するわけじゃないんだ……ただちょっと」
「違う違う！」
全力で否定するところが怪しさを増大させる。そのことをこいつが理解するときは来るのか、来ないだろうな。オーバーリアクションとったら、何も残らん。
叫んで心境が変わったか、表情を切り替えて、真顔で俺を見る。うげえ。
「俺は、女の子が大好きだぜっ！」
欲望を全力で俺にぶつけてきた。勘弁してくれ、何なら欲望のはけ口を用意してやろう。
「柊ー、ちょっといいか？」
俺の声が聞こえたようで、柊は席を立ってこっちに歩いてきた。
今あいつの席と俺の席は、窓側と廊下側で最も離れている。静かで良いことだ。

「めずらしいわね、永野君から私を誘うなんて……」
ちょっと違うんだが、用があるのは俺じゃないし。
「拓海がお前の体でエッチなことがしたいそうだ」
「えぇ！？　ちょと！」
多分、弁明をしようとしたであろう拓海に、喋る間を与えない柊の見事な足払いで、拓海は床に転がった。頭を抑えてうずくまっている。
痛そうだ。変なこと言うからこうなる。
「拓海、妙なことは口走らないことだ」
「お前が、言ったんでしょうが……」
「永野君、あんまりつまらないことさせないでもらえる？」
その割には、随分拓海は景気良く宙を舞ったが。まあつまらないことだったのは否定できない、というか否定しないので軽く謝っておく。
だが柊はまだ何か言いたげな顔をしている。
「……どうした？」
「私が、佐山君とそういったことになったら、どうするの？」
「いやいや、俺は最初から拓海が飛ばされると思ってお前を呼んだんだが」

俺の返事に何か釈然としないという感じだ。
でもどう考えても、柊が拓海に押されて、そういうことになってしまう光景は想像できない。無い、と断言できる。何なら賭けても良いだろう。
柊は何も言わない代わりに、拓海が俺に文句を言ってきた。
「やはりそうか！」
「当たり前だ」
拓海は俺を睨みつけたまま立ち上がり、自分の席に座った。そしてため息をついた。まあ災難だったな、同情するよ。
「何でお前みたいな男が」
「自分で言う分には良いが、お前に言われるのもなあ」
「デートデートって、何なんだよお前は！」
「ボキャブラリ少ねえな、つーかデートなんて遊びとかわらねえだろ」
「てめえ！　それを女の子にも言うのか！」
「いや、流石にそれは。ただデートというものに関しての執着が半端でなく、もはやエロしか考えてない男にならあえて言う」
俺の言葉に柊は、「うんうん」と頷いていた。それに気づいた拓

海は、声に出しさえしなかったが、表情は「ギャーッ」という感じで、絶叫していた。

「ななななな！　なんてことを言う！？」

「わりぃ、つい」

うっかり事実を……

「大丈夫、気にすることはないわ佐山君。すでに女子生徒の大半は、そのことを知っているし」

「なあああぁ！？　そそ、そんなわけねえ！」

「何ならアンケートでもとってみる？」

「……見事なカウンターパンチだったよ」

拓海は立ったままＫＯされた。

でもカウンターというよりは、一方的なラッシュじゃなかったか？

しかし柊には容赦というものが見られないな。投げ技も、言葉攻めも、流石はドＳだな。

「それで、葵と２人でデートという件についてだけど」

ちいぃっ！　拓海め、お前の撒き散らした無意味な爆弾が、核ミサイル級になって飛んできちまったじゃねえか。

「私もいいかしら」

「ダメなんだ柊……俺だって断られたんだぜ」

「そりゃそうでしょう。男子が一人増えたってしょうがないもの。だから、私も男子を1人連れて行くから。まあ簡単に言えばダブルデートね」

「お前彼氏とかいたの？」

「……私は、この可哀想な少年にチャンスをあげることにするわ」

そう言って柊は、拓海の頭を軽くなでる。その瞬間、拓海が壊れた。

「ひょあぁ！」と意味不明の奇声を上げたあと飛び跳ねた。

「お、おおおお……」

ビックリしすぎてる自分にあせっているようだ。

必死で自分を落ち着けようとしているのが、こっちからでも良く分かる。本当に感情が出やすい男だな。

「う、嬉しいんだけど、身の危険を感じる……」

そのセリフを言い終わるか言い終わらないか、まだ続きがあったのかもしれないが、突然俺の頭上の窓が開き、手が伸びてきて、拓海を廊下に引っ張り出した。

なんだか「殺す……」とか呟いている連中が結構な数いる。

「ひっ……ひぃやあああああああ！」

「おい、助けてやれよ。一応デートに誘ったんだろ？」

「……」

聞いてない。なんか拓海の悲鳴を楽しんでいる。やべえ、背筋ゾクッてなった。

「おーい、柊」

「……え？　私？」

「他に誰がいるんだよ……」

相当意識が拓海に向いていたようだ。これから柊には、さらに注意が必要だな。

「ダブルデートといっても、葵が嫌がるかも知れねえぞ」

「どうして？」

「葵疲れてるんだよ」

「……」

「どうした？」

「それは勘違いね」

決め付け、それよくないと思う。だがしかしこいつは聞くような女じゃない。

「でも、嫌がることは嫌がるでしょうね」

分かってるならやめておいてやれよ、とも思うのだが、これも多分言うだけ無駄というやつで。

「あの、永野君」

俺に話しかけたのは柊ではない。

このクラスの常識的な女子、岬優那。彼女が、なんだか落ち着かない感じで俺に近づいてくる。

「その、今日私もご一緒していいですか？」

「ん、ああ。いいよ」

「随分あっさりね。私のときとは違って」

そんなことにさほど意味は無い、と言い切るほど俺は堂々と嘘はつけない。柊に通用しないのは知っているが、とりあえず笑顔。あ、やっぱダメっぽい。

葵は、多分静かに遊びたいんだと思う。これは俺の勘。というよりは会話から読み取った感じ。

柊は静かといえば静かなんだが、おとなしく終わる気は全くしない。

それに引き換え、常識のある女子として定評がある優那ちゃんは、その辺の信頼が違う。

ここまでの俺の思考全て、柊には読み取られていた。

「私は、どれだけ非常識な女だと思われてるのかしら」
ため息をついて拓海の席に座る柊。
そういえば拓海は無事か、それともそろそろ死んだか。後者じゃないことを祈るが、前者ではちょっとがっかりかもしれない。
「でもねえ、優那。これはデートだから、ちゃんと相手がいないと」
「でも……相手なんて……」
「でもじゃないわ、相手なんていくらでもいるでしょう？」
確かに。その通りだと思う。優那ちゃんにデートに誘われて、断る男がこの学校に何人いるだろうか。
ただ今の発言に若干Ｓっ気を感じたのは、俺が過敏になっているだけか？
「まー、優那ちゃんもてるだろ？」
「そんなこと……ないです」
そうだろうか。
そういえば葵もいないな。どこだろう。
「葵なら職員室よ」
「そりゃどうも」

なぜ俺の思考が読まれたんだ……？

「簡単よ。今永野君、葵の席を見たでしょ」

「なるほど……いやこえぇよ。どんだけ神経張り巡らせてんだよ」

まあ柊がすごい特殊能力を持ってるのは、去年1年でよく知ってるから、今さらそれほどの驚きも無い。

職員室でなにやってるんだろ。

なんとなく俺の頭のすぐ横にある、窓を開ける。俺はこの時、教室にやってくる人がいないかの確認をしようとしたのだが、この窓曇りガラスだから、開けるまで分からなかった。

窓を開けて顔を出すと、数センチの距離、事故の0・1秒前の位置に、女子の顔があった。

「きゃあっ！」

「ぐあっ！」

そいつは、可愛らしい悲鳴を上げて、飛びのくのではなく、俺に頭突きをかましてきた。

「ああービックリした。あ、冬真じゃん、久しぶり～」

「お、おお。玲那か、お前の常識では挨拶は頭突きをかました後だったか」

あはははは、と玲那は実に可愛らしく笑う。笑顔はとても良いのだ

が、俺としては謝罪の言葉が聞ければなお良かった。

「お、お姉ちゃんと一緒に行きます」

「「「え？」」」

優那ちゃん以外の3人。俺と柊と玲那がハモる。俺のは理解した上での、「マジで！？」的な意味合い。多分玲那は完全に理解できていない。

そして1人、ぶっ飛んだ思考の持ち主である柊は、ある結論に至っていた。

「双子の、禁断の……はふぅっ」

柊は今までに見たことも無い表情を浮かべ、頬を赤く染めていた。どんな結論に至っていたのかは、柊以外は分からない。

1人状況が分からない玲那は、首をかしげていた。

第４話：禁断の……（後書き）

当然この小説に、同性愛は絡んできません。

第5話：金のもじゃもじゃ

「えぇー？　私が優那の彼氏？」

現状を理解できていない岬玲那に、大まかな状況説明をした。

妹である優那との関係が恋人というのは、やはりどうかと思うとのことだ。

優那、玲那の岬姉妹は、なんと身長、体重、スリーサイズが全く同じ（拓海調べ）で、違いといえば髪型と、目の形くらいだ。

髪型は優那は、肩くらいまでの長さの後ろ髪と、あとはツインテールが特徴的だ。玲那は、髪の毛を後ろでポニーにしている、髪の長さは柊くらいあり、腰までとどいている。

髪の色は姉妹同じで、赤っぽい茶色。目は妹が若干たれ目で、姉が若干釣り目だ。

「彼氏とかじゃないよっ……ただ一緒に行こうってだけで……」

「ふーん。ま、私はいいんだけど、冬真……葵は大丈夫なの？」

玲那が俺に視線を向ける。すでに騒がしいのと、騒がしくしそうな2人が来ることになってるから、今さら問題にもならない。とりあえず頷いておく。

それとほぼ同時に教室のドアが開き、葵がやってきた。

職員室での用事は終わったらしい。

「ごめん！　待った？」

「いや全然。それより、こっちから謝る、わるい」

俺の行動の意味が分からないのか、葵の頭にはクエスチョンマークが浮かんでいる。

「今日のデート、こいつら来るってさ」

いい終わると、箒が飛んできた。掃除用具庫から、一瞬で引っこ抜いて投げたらしい。

「でででっデートって何なのよ！」

「は？　行かねえの？」

「行くわよっ！　でもそんな……みんなの前で……」

「いや、だからこいつら来るんだって」

「は……？」

今初めて聞きましたという顔だ。さっきも言ったじゃねえか。

「謝ることってそれ？」

「そう、わりぃ」

「……いいわよ。別に。人が多いほうが、楽しいもん」

言ってることと態度違わねえか？　明らか拗ねてるだろ。

というか朝は、2人きりがいいって言ってなかったか？　俺の記憶違いなら別にそれでいいけど。

少し間が空き、なんだか拗ねていたようだった葵が、思い出したようにこっちを向いた。

「そうそう、なんかダストシュートから金色のもじゃもじゃが出てるのよ」

「「金色のもじゃもじゃ？」」

俺と柊がハモったのは、心当たりがあるからだ。ダストシュートにぶち込まれてもおかしくない金色。どう考えても、さっき連行された佐山拓海だ。

「なんか唸ってて、気味悪かった」

「……そうか、とりあえず俺はそのもじゃもじゃを救出してくる」

「え！？　危ないって、あれ絶対七不思議のなんかだよ」

「金色のもじゃもじゃが、ダストシュートにぶち込まれてる七不思議って、どういう状況だよ」

多分恐怖よりも先に笑いが来るな。

「もじゃもじゃ私も見てぇ！」

「やめとけ、がっかりするぞ」

「いいじゃん、私ホラーとか平気だから」

いや、最悪のコメディーだから言ってるんだけど。

しかし拒む理由も無ければ、そこまで拒むつもりも無い。なぜなら拓海がダストシュートに突っ込まれているだけだからだ。

「まあいいや。じゃあ行こうぜ」

「どんなのかなー、宇宙生物とかかな？」

残念ながらただの地球人。まぁバカさは宇宙レベルかもしれないけど。

別に金のもじゃもじゃの正体を、すぐに明かせばよかったんだけど、しなかったのは、万が一拓海じゃなかったときの事があるから。

あとこいつの目が尋常じゃなくキラキラしてたからだ。

なんだそれ？　ってな感じでがっかりされるのは拓海の仕事だ。

問題のダストシュートは、廊下を進んで最初の角を曲がったところにある。

案の定、見覚えのある金髪が飛び出ていた。

「や……やばいよっ！　う、腕の力が抜けてきた」

「すげ……宇宙レベルのバカだ」

「ああ、そうだな」

宇宙レベルのバカは、ダストシュートから頭の先だけを出している。
多分中でがんばってるんだろうな。
「おい、拓海」
「その声は冬真……引っ張り上げてくれ！」
「美少女と俺、どっちに引き上げてほしい」
「美少女！」
そうかい。じゃあ玲那に頼むしかないな。
「私がやるのか……？」
「こいつのリクエストだ」
渋々了承してくれた玲那は、拓海の金髪をつかむと、思いっきり引き上げた。
うわぁ。痛そうだ。
「いたたたた！　はげるはげる！」
「おらっ！」
顔が完全にダストシュートから抜けた。そうなる事によって、美少女と拓海の対面となる。
「いたた……び、美少女！？」

「何で……疑問系なのよっ！」

玲那は拓海の頭を両手で押さえると、完全にダストシュートの中に押し込んだ。

拓海は去年1年で、それなりにこんな目にあっているが、そのうちの何割かは玲那の手によるものだ。妹がおとなしい分なのか、玲那は加減を知らない。

そのため拓海は玲那が苦手だ。もちろん俺はそれを知っていた。

「う、うわあああああああ！」

すごい速さで落ちていく。まあ拓海は結構頑丈な体だし、大丈夫だろ。ダストシュートの出口は下にあるわけだし。

「じゃ、帰るか」

「そうだな」

俺と玲那がダストシュートに背を向けて、歩き出そうとしたとき、ダストシュートの入り口から手が出てきた。

ガコンという音を立てて、ダストシュートの入り口が開く。

「まだだぜ！」

だが、別に足を止めるほどの用事でもないので、俺たちは教室に戻った。

俺と玲那が教室に戻ってから少しすると、拓海が走って戻ってきた。

これでメンバーが全員揃ったわけだが、一体どこに行くつもりなんだろうか。

誰も発言しないので、柊が提案した。

「そうねぇ……じゃあホテルに」

「気が早い！」

「あら、行くつもりだったの？」

「行くわけねえ！」

俺の怒号で、なぜか全員がほっとしたように息をついた。

こいつらの中では、デートからラブホ直行しか考えていない拓海と俺は同等のレベルで考えられているのか？

心外だ。

「やっぱりゲーセンとか？」

「うわあぁ……やっぱあんたもてないんだねー」

「ちょっ！　それひどくねぇ！？」

玲那の鋭い一撃に、拓海がうろたえながらの反論。そこまで急所を抉る事は無いだろうとも思うが。

「俺は根っからのチェリーボーイさ！」

正論に思わず俺は「まさにその通りだな」と呟いてしまった。

「そうだろう？」と拓海は嬉しそうだが、チェリーボーイとプレイボーイを間違えたのでは無いことを祈っている。

「若い男女が3人ずついることだし」

柊がここまで言うと、玲那が立ち上がり抗議する。目が必死だ。

「私は女だぁ！」

「知ってるわよ。でも今日は男子扱いになるわ」

「ひどい！　ひどすぎないそれ！？」

「トイレも男子用よ」

「うわぁー！　いやだ！」

最後のはまずいだろう。

「とりあえず男装してきてもらうわ」

「えぇー……そんな……」

「でもお姉ちゃん……カッコいいと思うよ……」

「うっ……」

玲那は心のそこから嬉しくなさそうだ。優那ちゃんの最後の1言は、的確に玲那にダメージを与えているし。

そして玲那を男扱いするというくだりから、妙に生き生きしている柊はどうかしたのだろうか。

「まあ玲那ちゃんの扱いは置いておくとして、とりあえずご飯食べに行こ」

葵が提案した。まぁ腹も減ってるしいいだろう。

時間的には結構早いけど、どうせだらだらと長居する事にはなるんだし。

「じゃあ決定ね。1時間後に、現地集合。場所は一番近いガストでいいでしょう？」

柊の提案に全員頷く。

妙にリーダーシップがあるし、物事もパパっと考える。たまに普通に感心してしまうな。

「別に俺はこのままでもいいけどなー」

「そう？　じゃあ佐山君、私の準備……手伝ってくれる？」

「ぷふっ！」

拓海が妙な声を出した後、鼻を押さえて廊下に飛び出し、どこかに走っていってしまった。

変に想像の働く奴は大変だな……

それから拓海以外のメンバーは、教室を揃って出て、俺と葵は一度俺の家に向かった。

第6話：ギャップ力

家に帰り、とりあえず制服から私服に着替えることにした。
俺は普通のジーンズに、上はどっかの土産屋で買ったデザインロンT。普通の格好だと思う。

「葵、俺もう準備できたぞ」

「はっ、早いね……」

「女子は時間かかるな」

「男子が早いだけだよ」

そうかもしれない。というか多分そうなんだと思う。
俺の服選びは、選んだというよりも置いてあったのを取っただけだ。

まあしばらく待つ事にしよう。

しばらくたった後、葵は部屋から出てきた。
春っぽいワンピース。派手すぎないで、似合っていると思う。ただそれはいいのだが……丈が短すぎないかなぁ。あれくらい普通、なのか？
何に時間がかかっていたのかは、顔を見て分かった。普段より化

粧がしっかり目っぽい。ただケバイなんて言葉は一切出てこない。ナチュラルだが、いつもより可愛い感じだ。

幼馴染ながら、変わるものだ。

「な、なぁ」

「ん？　なに？」

言いにくい、というかぶっちゃけ言うのが恥ずかしいが、やっぱり言ったほうがいいというか、言っておきたいというか……

「その……だ」

「だから、なに？」

うーん……

「あの、丈短すぎないか……？」

ガツン、という音がした。なんだかお星様がキラキラしている。まだ夕方くらいなのに。

というより痛い。普通に痛い。幼馴染である俺の頭をつかんで、壁にぶつけやがった。

「なによ、それ……」

「こっちのセリフだ……！」

すげえ痛いぞ？

というか、何でそんなため息つかれてんだ俺。なんか「あーあ」とか言いながら、葵は下向いちゃってるし、分け分からねえ。

なぜか会話少なく、俺と葵は近くのガストまで歩いていった。

「おお！　葵ちゃん。可愛いね」

「……ありがとう」

ガストの入り口の辺りで拓海が待っていた。

どうでもいいんだが、金髪のチャラチャラした男がそんな場所に立っていたら、２人に１人は退くんじゃないか？　営業妨害じゃねえ？

こいつはまた気合が入っている。

チャラい……

「お前、なに考えてんだ？　ファミレスだぜ」

「お前こそやる気あんのかよ。ジーパンに、ロンＴだけって」

「うるせーな。お前ほどに気合が入る理由が分からん」

「いや、気合が入らないわけがないんだ。葵ちゃんだって、化粧いつもより「何言ってるの！？　普通よ！　普通！」

葵が拓海の言葉をさえぎる。
まあ一応気合が入る事は入るだろう。というか俺だって、本当は年中ジャージでいたい派だから、気合が全く入っていない、全くの平常というわけじゃない。
ただ俺が言いたいのは、拓海のはやりすぎ。どんだけ髪の毛盛ってるんだよ。
「とりあえず3人だし、中で待つ？」
拓海がまともな提案。とりあえずこんな入り口で待つ事もないので、3人で店内に入った。

「何名様ですか？」
「6人、もう3人来る」
店員に人数を言うと、席に案内される。奥のほうの席、密かに気に入ってる場所だった。
席に座るとお冷が運ばれてくる。まだ店内が込んでないので、いろいろと対応が早い。これが込み始めると、注文した料理が来るまでの長い時間が鬱陶しくなる。
「他のみんなはまだかな？」

「もう時間だしな。そろそろ来るだろ」

俺の予想は当たり、すぐに2人やってきた。岬姉妹だ。

姉の玲那はジーンズにシャツという俺と同じ感じで随分軽い。化粧もいつもと変わらない感じだ。

さすがに男装はしていないようだが、結構カッコいいという言葉が似合うやつだ。

そして妹の優那ちゃん。拓海は優那ちゃんを見てから、開いた口がふさがらない状態になっている。かく言う俺も目を奪われてしまった。

白いふわっとしたTシャツをトップスに、黒いフリルのついたスカート。これがかなり丈が短い。葵のワンピースにも驚いたが、これにはもっと驚いた。

優那ちゃんは、学校の制服のスカートは長めだから、新鮮だ。ギャップというやつだろう。

「……くっ、ダメだ……直視しちゃやばい……！」

「……お前衝撃受けすぎじゃねえか？」

「ニーハイが……絶対領域が……！」

なんだそりゃ。

なんて言えるのは本当に見てしまう前だけだった。

絶対領域。スカートとニーハイの間の肌が見える部分。絶対領域不可侵条約。意味不明だがこの破壊力が絶対領域の所以だ（拓海談）

俺は別にそこに偏った趣味はないが……すごいな。ギャップが。

「あとは沙羅だけだな。しかし佐山の頭、やり過ぎだろ」
玲那は拓海の頭を見てケラケラ笑っている。
顔とか見てると女子なんだけど、話してるところとかは結構男子のノリに近いよな。
「そ、そんなことねぇよ。というか、岬も何でそんなにやる気ねえんだよ」
「お前らとで気合が入るわけないだろ。あと、苗字で呼ぶな。ややこしいんだよ」
「分かったよ、じゃあ俺のことは拓海と呼んでくれていい」
「え？　佐山そんな名前だったの？」
「うそぉ！？　冬真はずっと俺のこと名前で呼んでたじゃん！」
「悪い、記憶から消しちまっていた。そうそう、マサユキだな」
「早くも消されてる……」
分かりやすく元気をなくす拓海に、「冗談だって」と玲那は笑っている。
「しかし、何で玲那は冬真とは名前で呼び合ってんだ？」
拓海の疑問に、玲那と揃って少し考え込んでしまった。
葵は葵なんだが、それを除けば、俺が名前を呼び捨てで呼ぶ女子なんてのは玲那ぐらいのものだ。しかし俺は、まぁ失礼かも知れん

が、あまり玲那のことを女子としてみていない。
仲のいい友達感覚だ。男友達と変わらない感覚だ。
「冬真は、友達だからかな」
「俺もそんな感じかな」
「なるほど、つまり俺の場合は友達以上になれる可能性有りと」
「何でそこまでポジティブなんだお前？」
「そりゃ無いって。私あんまり男に興味ないし」
そのセリフ１つで何人の男がムンクの叫びみたいになっちまうのか、想像もできないが、俺としてはそのへんはどうでもいい。
普通にいい友達の１人だ。
「あとは沙羅ちゃんだけだね」
「うん、そうだね。でも時間かかってるよ……」
「気持ちは分かるよ優那ちゃん……沙羅ちゃんだもん、どんな卑怯な手を使ってくるか……」
「うん……ただでさえ卑怯なのにね……」
葵ちゃんと優那ちゃんは、顔を向き合わせて何かぶつぶつと言い合っている。しかし、お前らは戦争でもするのか？
柊の奇襲攻撃への備えでもするのか、まああいつなら奇襲くらい

やりそうな感じもするけど。

「というか優那ちゃんもだよ……そんな短いのはいてきて……」

「そ、そんなの葵ちゃんもじゃないですかっ」

何なんだろう。2対1かと思いきや、サバイバル戦なのか。

申し訳ないが、柊が相手では勝てる気がしない。勝負事では、あいつは恐ろしく強いからな。それにサバイバルなんてなおさら強そうだ。

「私が最後ね。待たせてごめんなさい」

気にするな、そんなに待ってない。

こんな感じに返事をしようとしたのだが、言葉は衝撃で押さえ込まれ、口だけがポカーンと開いてしまう不本意な結果となった。

だがそれは俺だけではなく、拓海はもちろんのこと、優那も玲那も。葵すらも驚いていた。

本日の衝撃ギャップ大賞。優勝はゴスロリ衣装の柊沙羅。

黒がベースの丈の短いワンピース、というかドレスといっても間違いじゃないだろう。しかもフリフリがいっぱいついてる。

喋り方も穏やかで、表情もあまり出ないもんだから、私服も大人しいと踏んでいたのだが、これはビックリした。

「かわいー！　沙羅そんな格好すんの？」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわ」

玲那が飛びついた。
柊は感謝の言葉を返したが、ならもっと嬉しそうにしろよ、とも思うが柊はいつもこんな感じだ。
しかしすごいと思うのが、これがガストまでの道のりを歩いてきたという事実だ。

「お前……来る途中、大丈夫だったのか？」

「何が？」

「職質とかされなかったか？」

「私が不審者だとでも？」

「いや、まぁファッション……だよな」

「まぁ握手をせがまれたり、写真撮影させてほしいとかは言われたわね」

それって、やばい連中なんじゃないのだろうか。

「したのか？」

「あら、気になる？」

「言いたくねえなら別にいいけど」

「握手くらいはしてあげたわ。うちの制服着てたし」

確定。やばい連中だ。

「卑怯だわ……」

「全くです……」

どんどん小さくなっていく葵と優那ちゃんに、若干の不安も感じる。本当にどうしたというのだろう。

まさかこの3人、店内で戦い始めたりしないだろうな？

まあ思うことはあるが、全員揃ったので、メニューを開きつつ、店員を呼び出すベルのボタンを押した。

第7話：難しい2択。デリカシー、とかじゃない。

注文して、少しすると料理が運ばれてくる。
俺と拓海と、なぜか玲那の3人で、全員分のドリンクバーを取りに行くこととなった。かわいそうに完全に男扱いとなっている玲那は、やはり納得がいっていないようで、ぶつぶつと何か言っている。

そこを拓海が不用意に励ます。

「まーまー、ボーイッシュも良いって」

「うるせえ！」

やはり玲那はキレる。
俺はそのやり取りから一線引いて、というか前に出て、さっさとドリンクをコップに入れる。
コーラとオレンジジュース。俺は炭酸が好きだが、葵は好きじゃなかったはずだ。

俺はとっとと席に戻ろうと思ってたのだが、拓海ではなく玲那に呼び止められた。拓海なら無視したのにな。

「私は、男っぽいのか？」

落ち込んでいるというよりは、マジな疑問っぽい様子だ。
正直なところ、男に見えなくもない。化粧が薄くて格好も男っぽいから。ただこれで男なら拓海より女顔、そして破格の美形となる。
ただこれを言うと肯定することになるので、とりあえずは別の答

えを言っておく。

「まさか、お前は間違いなく女の子だ」

「女の子言うなっ！」

……え？　予想外だ……

こいつ男になりたかったのか。新発見をしてしまった……

ショックを隠せるか不安だが、とりあえず席に戻ることにする。

「葵、オレンジジュースで良かったか？」

「うん、ありがと」

オレンジジュースを葵の前に置くと、満足そうに微笑んでくれた。

俺の記憶は間違いじゃなかったらしい。

俺が注文したのは、ハンバーグ。それにチーズが乗っているもの。葵も同じものだ。ただ量が少ないのは、やっぱり女子ということだろう。

弁当箱もすごく小さいからな。

全員揃うのを待ってから食べ始める。

のだが、食べ初めて数秒。俺のポテトが消失した。

「……拓海……」

仕返しに俺は、拓海の皿を奪った。

「ちょっと！　それちょっとした悪戯じゃねぇよ！」

皿を取り返される。

なんか静かだ。どうもふざけているのは俺と拓海だけで、皆さんせっせと食べているようだ。

「よし、食うか」

「そうだな」

とりあえずファミレスだし、食べ始めることにした。

少しすると、横から腕をつかれる。横に座っているのは玲那だ。

「冬真、口開けて」

「……もうちょっとそれっぽく頼……」

ちょっと無茶を言ってみようと思って思い出した。こいつは、確か男に憧れているとかいないとか、あまりそういうことをさすべきじゃないな。

「あ、ああ……何かくれるなら俺が自分で……」

「何に気使ってるのか知らんが、いいから口開けろ。はいあ～ん」

やる気なさげだが、とりあえず言われたとおり口を開けると、で

かいステーキを掘り込まれた。
殺す気か！　のどに詰まる！
「んん！」
「おいしい？」
「う、うまいがでかい……お前、男っぽい料理だな」
玲那の前には誰もが満足といった、ボリュームのあるステーキが置かれていた。
「そうなんだよね……ちょっと食べきれない」
「あぁ、そうか。ただ俺もそれなりにボリュームが……」
俺だってフードファイターじゃないさ。
「玲那、俺も手伝おうか？」
「マジ？　じゃあ佐山、はい、取って」
「え？　あ～んっていうのは？」
「は？　私がそんなことあんたにするわけないじゃん」
「冬真にはしてたじゃないか……」
「だってめっちゃしてほしそうな顔してたし」

「マジかよ！」

これは俺が叫んだ。あ～んしてほしい顔ってどんなんだ？

「俺だってしてほしいぞ！」

お前プライドはないのかよ。そう思ったが、俺はしてほしそうな顔をして、突っ込まれたことになってるので、言える立場じゃない。

「佐山は露骨に顔がエロいんだよ……」

「露骨に傷つきましたよ……」

さすがに哀れと思ったのか、玲那が食べさせてやると、拓海は一気にテンションを持ち直した。

とりあえず、うるさいのに挟まれてるので、前を向くと、真正面に座っている葵と目が合った。

「と、冬真。あ、あ～ん」

「俺、お前と同じの食ってんだけど？」

「あっ、いや……いいの！　私のは、味が違うと、思うから……」

どういう理屈で味が変わるのか知らんが、突き出してくれたハンバーグを下ろさせるのは気がひける。

まあそれでいいのなら、食べるくらいはいいけど……

口を開けると、ハンバーグがはいってきた。

「おいしい？」

「ああ、うまい」

俺のと同じでな。

意味があったのか知らないけど、「良かった～」と、葵は満足そうだ。

そしてすぐ横の拓海、柊ペアでも妙なことが行われていた。

「目を閉じて、口をあけて……」

「はいはいはい！」

やたらといい返事をして、拓海が言うとおりにすると、その口の中に、赤いレタスが入れられた。

……赤いレタス？

「ぐあああああ！　口がァ！」

「おいしい？」

「う、う、うま……い……よ」

「そうでしょう、スパイシーで」

サラダにそこまで強烈なスパイシーは必要か？

「優那、あなたもやってあげたら……」

「へっ？　誰に？」

「玲那に」

「そんなの、やってもしょうがないんじゃない？」

「食べさせてもらって、嬉しくない男はないわよ。ほら、佐山君も嬉しさで言葉も出ない状態だもの」

「待て！　それ以前に私は女だ！」

玲那の演技をさらっと無視すると、柊は何かを優那に耳打ちしていた。

すると、分かりやすいほど一気に顔が赤くなり、しばらく考え込んでいたが、決心したように顔を上げた。

そしてチキンにフォークを指して、優那ちゃんは玲那の口元に突き出した。

「あ、あ～ん。お姉ちゃ……お兄ちゃ「沙羅！　うちの妹に何を吹き込んだ！」

玲那の抗議を、柊は無視する。というか聞こえていないようにも感じる。

何かに夢中であるかのような……

「は、早くっ」

「あ、あの、恥ずかしいんだが」

「私もだよ……お兄ちゃん」
「……その呼び方はやめろ」
ほんとに柊は何を吹き込んだんだ？
「な、なんか……興奮するな……」
「な、なんだろうな……」
しかし、俺も多少変なものは感じていた。
この、なんというか禁断というのか……。
「……はむっ」
「お、おいしい……？」
「う、うん……」
「――ぷふっ」
玲那の口からフォークが離れた。
直後、柊が立ち上がりトイレにかけていったが、何があったんだ？
「お前、ほんとに兄でいいんじゃねえか？」
「なっ！　佐山まで何を言いやがる！」
玲那が立ち上がり、フォークを佐山に突き刺そうとした。

正直そういうところが女子っぽくないのだが、こいつはどっちかというと、男子に近づこうとしているようだしな。

「でも、お兄ちゃんっぽいよね」

「葵まで……」

「うん。こんなお兄ちゃんなら私もほしい」

「……冬真、もう一度聞きたいんだけど。私は男っぽいか？」

「当然。お前は男の子でも、問題ない」

「うるせえーっ！」

玲那は、トイレのほうに走っていってしまった。店内を走り回るのは、迷惑だぞ？

しかし、俺何か悪いことといったか？　結局分からないのだが、あいつは女の子らしくいたいのか？　まぁ普通はそうなんだけどな。

女だけど、女の子扱いされたくない。うーん、女心って分からないな。

俺が考えていると、柊が帰ってきた。

「玲那とすれ違ったんだけど」

「ああ、よく分からねえけど走っていった」

「そう、じゃあ私はもう一度お手洗いに……」

「待て、何するつもりだ？」

「女性にそんなこと聞くの？　デリカシーがないわね」

……そう言われてみれば、その通りだ。

確かにデリカシーの欠片もない発言だったかもしれない。

「襲いに行くのよ」

「だから待て！　そんなやつにデリカシー云々言われてたまるか！　さっきは何しに行ったんだよ」

「鼻血を止めに」

「お前やっぱ危険人物だ！」

何かの衝動に駆られて、危険な行為に走りそうな柊を止めつつ、玲那が帰ってくるのを待つことにした。

第8話：幼馴染と、何かあってたまるものか

「なんかノリで飛び出しちまったけど……」

女子トイレで、岬玲那は鏡を見つめて呟いた。
ショックだったから飛び出したというのは、実はあまりなくて、とりあえずノリで飛び出したというのが大きかった。

しかし、最後に聞かされたある少年からの一言は衝撃だった。

「男の子でも問題ないって……」

大きなため息をついた。
彼女は、鏡に映る自分の顔を見て、考えた。

「男に見えるかなぁ……」

もちろん少年は、容姿から言ったのではなく、玲那の性格や人との関わり方から言った事だったのだが、そこは不完全な言葉というものであるために、些細な勘違いが発生していた。

しかし、ファミレスに友達と来てトイレにこもるなどというつもりは、彼女には毛頭なく、席へと戻ることにした。

「ただいまー」

玲那が帰ってきた。何か考えることがあったか、柊から逃げたのか、それとも単純にお手洗いに用があったのか。

分からないけど、まぁどうでもいいや。

「おかえり……お兄ちゃ「それもういいって！」

「ええー」

あまり残念じゃなさそうに柊が言ったが、玲那は断固拒否の姿勢を崩さない。

さすがに飽きたようで、柊はコップの中のジュースを飲み干すと、椅子にもたれかかり分かりやすく脱力した。

葵も食べ終わり、優那ちゃんも食べ終わった。俺と拓海も結構前からジュースばかり飲んでいる。

「私だけ全然食べてない！」

「そりゃあ、突然トイレに行くもんだから」

「沙羅もじゃん！」

「私は食べるのが早いからね」

柊は「ふぅ……」とため息をついた。まぁ女子は小食で可愛さを

アピールしてるとか、誰かに聞いたことがあるくらいだから、正直早食いなんて褒められるもんじゃないだろう。

「うーん、食べきれるかなぁ」

「食えるか考えて頼めよ……」

俺が言うと、玲那は「でもなぁ」と自分のおなかをさすりながら言った。

「確かにあまり食ってないんだけど、間にいろいろしすぎて空腹感がなくなっちゃったんだよな」

「俺は別にそうでもないんだが、元が小食なんじゃねえの？」

「お前は喋りながらもパクパク食べてたし、食ってるだけの時間もあったじゃないか」

なるほど、思い返してみれば、玲那は叫んだり、まあ主にそれだけだけど喋っている時間も長かった。

それなのにトイレに行ったりしてたわけだからこうもなるか。

「しょうがない、俺が食ってやる」

「そんな安請け合いでいいのか？　お前も結構食ってただろ」

「俺は常人の3倍食う」

拓海の体のどこに入るのか知らんが、体の大事な器官を削ってまで、胃袋を巨大化させたというのなら納得だ。バカにもなる。

ただ口先だけということでもなかったみたいで、ガツガツ食べ進めている。

「見かけより食うな。お前」

「まあね。全部筋肉に還元されるのさ」

まあ脳に一切還元されていないところを見ると、その通りみたいだ。

とにかく食べ終わったところだし、会計だよな。合計は５０００円ちょいだ。

「とりあえず葵のは俺が出すわ」

同居しているとは言えないので、できるだけ不自然じゃないように言う必要がある。これに関してはフォローをしてくれる拓海はありがたい。

本当は知られたくなかったけどな。

「私は優那の分も出すわ。姉妹だし」

「兄弟じゃ……「ないっ！」

なぜか岬姉妹を兄妹にしたがる柊を、ばっさりと玲那は切り捨てた。

この流れだと、柊の分は拓海が出すという流れになる。

もちろん本人もそれを感じているようで、財布と緊急会議を始めていた。だが踏ん切りがついたのか、何とか声を絞り出し「俺が出

すよ……」とだけ言い、ちゃんと2人分払った。

レジで料金を払って外に出ると、結構暗くなっていた。

時間も、まぁ帰るのには早いけど、これからどこかに行くにしては遅いくらいだな。女子もいるわけだから、深夜まで遊ぶわけには行かないし。

「そろそろ解散にするか？」

「まあ私は何時まででもいいんだけど……」

「柊はそうかもしれんが、優那ちゃんや葵は、あまり遅くなるのもな」

いい終わると同時に、首筋に激痛が走り、強引に振り向かされた。

「私は？　なあ私の心配は？」

「も、もちろん玲那もな」

「そうだよね、俺と冬真だけならともかく……そういえば最近冬真と、深夜まで遊ぶことなくなったな」

「まー葵が……」

そこまで言ってから気づいた。迂闊だった。

拓海も「あっ！」って顔してるが、お前も迂闊な質問するんじゃねえ！　この状況、一番恐いのは言うまでもなく柊だ。

こいつの頭の回転ときたら……

「永野君？」

「は、はい……柊、さん？」

「どこまでやったのかしら？」

ほらぁー、こうなるよな普通。高校生の男女が一緒に住んでるとか言ったら、俺だってそういうところに行き着くよ。

でも俺らは幼馴染でそういうのじゃない、というところまで賢いお前には要求したい。

「とは言っても、あなたたちでは……全然でしょうね」

やっぱりこいつは俺よりも数枚上手、しかも周りへの配慮までしていただいているという。これはもう、立場上俺が完全に下だ。

ちなみに葵はというと、全く状況に気づいてない。

「よ、よしっ。帰るか、な、葵」

「え？　うん、じゃあそうしよっか」

「じゃあ俺も帰るわ、柊送っていくな」

「ええ、よろしくお願いね」

拓海のテンションは最高潮だ。

「じゃあ私らも帰るわ」

「そうですね」

岬姉妹もここで解散することに異議は無い様で、お開きとなった。

家についてすぐ、俺は気になっていたことを葵に聞いてみることにした。

「なぁ、良かったのか？」

「ん？　何が？」

「だから、今日だよ。２人だけじゃなかったけど」

「あー……。別にいいよ」

「そうなのか？」

「そうなの」

葵がそう言うので、あまり深く聞くのはやめておくことにしよう。楽しかったのなら、それでいいから。

葵はすぐに着替えて、いつもよりも気合が入っていた？　らしい化粧を落としていた。

化粧なんかしなくても、やはり綺麗な顔はしている。

ちなみに俺は服もそのまま、化粧なんかしてたらヤバイ。

「……楽しかったし」

「そうか、良かった」

「でも今度は2人で行こうね」

「ああ」

「なんか私疲れたし、もう寝るね」

「別に俺はいいけど、まだ8時なってねえぞ？」

「うん……でも疲れちゃった」

「風呂くらい入れよ」

「当たり前でしょ！　入るわよ！」

そりゃ風呂くらい入ると思っていたが、ファミレス行って、ちょっと騒いで疲れたって、体力ないなあ……

しかし話し相手がいないと、起きてても暇になるな、どうするか。

「浸かったまま寝るなよ、溺死する」

「大丈夫よ……別にふらふらになるほど疲れてるわけじゃないし」

「結構、疲れて見えるが」

「気のせい」

一度のんびりしてから、葵は疲れが噴出したような状態ではある。
別にさっきのはギャグとかじゃなく、本当に湯船に浸かったまま寝ると危険だって言うし、それなりに心配していたんだが。
まぁ本人が大丈夫だといってることだし、のんびりしてるか。

風呂、長くねぇ？　もう9時になりそうなんだが。
1時間近く余裕で風呂に入ってることになるけど、大丈夫なのか？　俺はサッと入ってサッと上がるから、そうなだけで普通これくらいか？

「うーん……」

寝てた、そして溺死。笑えねえ。

「くそっ、なんか落ちつかねぇなぁ……」

ジッとしてられない。俺はガキか。熊か。
どうすっかなぁ。

「とりあえず、声だけかけてみよう。それがいいな、うん」

自問自答。結果、声だけかけるのなら問題あるまいという結論に達した。

とりあえず、脱衣所の扉の前までやってきた。中に葵がいると思うと……この扉も、何か特別なものに感じるな。幼馴染でも女子だ。

「おーい、生きて……」

「……へっ？」

なぜか、俺の声で扉が開く。「開けゴマ」と、言ったつもりはなかったが、なぜか開いた。

俺は今、結構パニック状態なんだが、目の前には裸。バスタオルで前を隠してはいるが、ほぼ全裸の状態の葵が、口をポカーンと開けて立っている。

色白な肌は、蛍光灯の光でほんわりと光っていて、体からは湯気が出ていた。

「……なんで？」

俺の問い。なんで、服を着ていないのに扉を開けたんだ。

「とっ、冬真こそ、何でそこに立ってるのよ！」

葵もパニックだったみたいだが、とりあえず怒りの感情が出てきたようだ。

「俺はただお前が心配でっ……！　っつーか、お前は何で服を着てないんだよ」

「着替え用意するの忘れたの！　ていうか、出て行けぇ！」

「なっ！　……つーか忘れたなら取ってくるけど？」

「いらないわよっ！　バカァ！　早く出て行け！」

「出て行っても解決しねぇよ……」

「うっ……！　そうね、じゃあここで目を瞑ってなさい！」

そう叫んだのと同時に、俺の顔めがけてバスタオルが飛んでくる。
なんだか妙に暖かい。
多分今の今まで、葵が巻いていたものだ。
ってことは……

「お前……！　なにしてんだっ！」

「着替えてくるからここにいることっ！」

そう叫ぶと、戸を閉めて脱衣所から出て行ってしまった。

……俺はいつまでこうしてればいいんだ？

第9話：私立紅里工業高等学校

「……この、エロ大魔王……」

「いや、あれは過失だ。つーか事故だ、俺は悪くねえ」

俺は寝巻きに着替えを終えた葵と、椅子に座って向き合っている。その顔は、どうも怒りで真っ赤になってしまっているようだ。

確かに結果として申し訳ないことをしたわけだが、それはあくまで事故で、葵が１００パーセント被害者というわけでもない。

ちなみに脱衣所からは、１０分くらいたってから出た。２時災害を防ぐためにはしょうがなかった。

「何であんな場所に……」

「だから心配だったんだって……」

俺にはそれしか理由がない。

普通に葵が、溺死しないか心配だったのだが、どうも葵はさっきよりも顔を赤くしてうつむいてしまった。もしや、噴火数秒前だったりするのか？

「……もう寝るね」

「分かった、俺はまだ起きてるわ」

以前顔は真っ赤のままだが、それが噴火することはなく、葵は階段を登って２階の部屋に向かった。

……暇になっちまったな。
とりあえず、コンビニでも行こう。

もうすでに外は真っ暗。
女子が一人歩きするには心配があるが、俺みたいなのがうろうろしていても別に問題はない。
歩いている人は少ない。しかし、大きな道路のほうに来ると、やはり人はいる。
それも、ものすごく見知った顔がいる。
「拓海、こんな時間に何してんだ？」
「……その言葉、そっくりそのままお前に返すよ。葵ちゃんはどうしてるんだよ」
「寝た」
「まだ8時だよ？」
「俺に言われてもな……。どこ行くんだ？」
「コンビニだよ……」
そう答える拓海の表情は、なぜだか疲れきっている。

「俺もだ、一緒に行こうぜ」

拓海と一緒にコンビニまで歩いていった。

コンビニは２４時間営業。すごく便利なものだと思う。

そして便利で、使い勝手がいいここは、夜は不良の溜まり場となっていたりする。やはりバイクが数台止まっていて、入り口の前に不良がたむろしている。

それを無視して店内に入る。

「冬真殿、それに拓海殿も」

「あ？　武蔵か。何してんだ？」

「ちょっと使いを頼まれたもので」

店内には、ファミ通を立ち読みする、パシられ武士の宮木武蔵がいた。こんな時間にコンビニに来て、まさかクラスメイト2人と出会うとは思ってなかった。

拓海が武蔵を見て、つっこんだ。

「お前ほんとにお使いかよ、思いっきり立ち読みしてんじゃん」

「ははは、まさかコンビニにファミ通があるとは」

「答えになってねぇよ」

拓海の言葉を、武蔵は笑ってごまかしていたが、突然表情を変え

た。
その目線は俺や拓海の後ろ。たむろしている不良たちに向けられていた。

「あいつら、紅里の者にござる」

「紅工か……あいつら俺たちのこと見てなかったみたいだけど、あいつがいたらヤバイな……」

拓海の言う紅工。正式名称は私立紅里工業高等学校。ここら辺ではそれなりに名前が知れた、不良校だ。
俺や拓海、もちろん武蔵も不良というわけではない。まぁ真面目な生徒ともいえないと思うが、喧嘩ばっかりしたりはしないし、当然だが勢力争いだなんて物騒なものには興味はない。
しかし、俺たち3人は紅工の生徒と少しばかり面識がある。一度揉めたことがあるからだ。

そして「あいつ」というのが現在紅工を仕切っている人物で、去年俺たちと揉めたときの紅工の中心人物だ。

「確かに、こんなところで乱闘騒ぎなんて笑えねえ」

「だからお前はファミ通読んでたのか？」

「まぁそれはあまり関係なかったでござるが、一番目立つ拓海殿が来てしまったおかげで、今は立ち読みでもして時間を潰すのが得策、となってしまっているでござる」

確かに、ここまで純粋な金髪は少ない。日本ではめちゃくちゃ目立つことだろう。

「8人はいるな……」

「そもそもここは、紅工の連中なんていなかっただろ。あいつら何してやがんだ？」

「分からないでござる。しかし、ただ事ではなさそうでござるよ」

どうしたものか。家にはすでに寝ている葵が1人。
すぐに帰れる距離だから、大丈夫だと踏んでいたが、こんな場所で足止め食うとは思っていなかった。というか、こんなところでのんびりしてられねぇ。

スナック菓子を適当につかみ、俺はレジに置いた。
金を払い、出口に向かう。

「おぉ～？　やっぱりお前じゃねーか、蒼坂の色男君」

……最悪だ。よりによって「あいつ」に出会ってしまった。後ろから、拓海と武蔵も出てくる。紅工の全員がこっちに注目していた。その中の1人が拓海のほうに歩み寄ってくる。

「おい、金髪。俺の顔、憶えてるだろ」

「は？　知らねーけど？」

「……死にてえのか？　状況見えてる？」

挑発に乗って、前に出かける拓海を、右手で制する。こんな場所で乱闘になったらまずい、それに数でも不利だ。

その様子を見ていた「あいつ」が笑みを浮かべ俺の顔を見る。
私立紅里工業高等学校2年。馳河類。去年、拓海に喧嘩をふっかけてきて、最終乱闘にまでなった危険な男だ。

「大人だな、まぁ。こっちはやるけど」

頬に痛みが走る。馳河が、俺の顔面を殴り飛ばした。
後ろに倒れて、ゴミ箱に頭を打ちつけた。スナック菓子が袋ごと飛び、馳河にぶつかる。それを踏み潰して馳河が、俺のほうへと近づく。
そして俺の胸倉をつかみ上げようとしたところで、馳河は後ろに飛んだ。

「てめぇ！　ふざけんなよ！」

拓海が馳河を殴り飛ばしていた。人が我慢しているのに、お前がふざけるな。

「おい！　やめろ」

「うっせぇ、ダチが殴られてて見てられるか！　……一発は返した。逃げるぞ」

無言で頷いた武蔵が、背中から木刀を抜き出し、構えた。この状況だから何でもいいが、お前そんなもん日常的に持ち歩いてるのか？
下手したら警察来るぞ？

そしてその木刀を、連中に投げつけた。じゃあ構えるなよ、とつっこんでいる暇はない。

木刀をよけて、開けた道を3人で走りぬけた。

「……逃がすかァ！」

後ろから追ってくる紅工の連中を振り切るために、俺は住宅地のほうへと全速力で走った。

住宅地は結構複雑だ。俺は土地勘をフルに活用して、人の家の庭とかを使ってどうにか振り切った。

俺は今、知らん人の家の庭に飛び込んでいるわけだが、どういうわけか金髪の、しかし拓海ではない人物と向き合っている。そいつは明らかに不自然だ。

なぜか真っ黒なコートを着ているという時点でおかしいのだが、マスク、サングラス、ヘッドホンのフル装備は、むしろ俺は不審者とアピールしている。

「あっ……いや。俺は不審者ではないからな」

「そうなのか？　でも俺がこの家の人間だったら、迷わず警察呼ぶ」

「だったら？　お前はここの人じゃ……」

「ねえよ。俺の家はこの辺だが」

「なるほど、俺はこの辺のことはよく知らなくてな。まぁ人探しで来てるんだが、道が分からなくて困ってんだ」

「……道案内してるほど暇じゃねぇぞ？」

「あーいや。一般人巻き込む気はねぇよ」

「そいじゃ、アデュー」と、妙にかっこつけて不審者は俺の前から消えた。

とりあえず、あまり長く葵1人で家で寝させているのも問題なので、俺は家に帰ることとした。

途中、完全にのびている紅工の連中が転がっていた。理由は知らんが助かった。

「ただいまー」

誰も起きていない家に帰ってきた。当然返事は返ってこない。

ちょっと全力で走って疲れた。俺は風呂に入って、すぐに今日は寝ることにした。

第9話：私立紅里工業高等学校（後書き）

男ばっかだ……

第１０話：バカは風邪を引かない、のだろうか？

今日の朝はいつもと違っていた。
昨日殴られた頬がピリピリ痛む。だが、何が違うかというと、それよりも家が静かなのだ。この時間なら、既に葵は起きていて、リビングにいる。
まぁ、完璧人間というわけじゃないし、寝坊くらいするか。
俺は軽く顔をシャバシャバと洗ってから、葵の部屋の戸をノックした。だが返事がない。完全に眠っているらしいな。
ほうっておくわけにもいかないので、俺は戸を開けることにした。この部屋は俺の部屋でも姉さんの部屋でもなかった、別の部屋で、葵の部屋となっているので、勝手に入るのは若干忍びない。
ただまぁ中に葵はいるし、遅刻するわけにもいかない。

「おーい、葵」

「……」

寝息を立てて寝ているのだが、なんだか息が荒い気がする……
昨日妙にダルそうだったこともある。嫌な予感がする。
軽く額に触れてみると、汗で湿っていた。それに熱い。

「これは……結構まずいぞ……」

まずい要因はいくつかある、もちろん葵が高熱を出しているという事実も非常にまずい。だが困ったことに、うちは今かなり特殊な

状況だ。高校生2人だけで住んでるんだからな。
それに学校に連絡もしないといけない。だが、俺が連絡するのは絶対おかしい。となると、やはり杉下家の人の手を借りるしかないか……

葵は結構頑丈で、俺の知る限り体調を崩すことはほとんどなかった。こんなとき、俺はどうするべきか……

とにかく俺は受話器を持った。もちろん杉下家に、連絡するためだ。

『もしもしぃ、朝っぱらからどいつ様ですか～？』

「その対応、俺じゃなけりゃやばいぞ」

『あっはっは。君だと分かってやっているから心配するな』

「だと思った……つか、のんびり喋ってる暇はねぇよ。葵が熱出して、今もベッドなんだよ」

『そうか……今から行くっ！　と、言いたいのだが、私はどうしても行けないので冬真君に任せる』

「はぁ！？　てめぇ、娘が倒れてるんだぞ」

『君じゃなけりゃ任せん。信頼してる、よろしく頼むよ。あと学校に連絡は入れておくから』

信頼している、とこのおっさんにはちょくちょく言われるが、今回のは声で分かる。真面目に、俺に言った一言だった。つーか、全

部放り出して来いとも思うが……
とにかく信頼されてしまい、任せられてしまった。
「分かった分かった」
いつもどおりの返事をし、受話器を置く。全く、頼りにならないおっさんだ。
俺はもう一度受話器を取り、学校に電話をかけた。
「あー先生？　悪いけど、俺今日休む」
『分かったじゃあな』
「ちょっと風邪が……っていいのかよ」
『いいぞー、来ない分には大歓迎だ』
それもどうかと思うが、電話は向こうから切られてしまった。菅原先生は本当に教師なのか？
「……冬真……学校、行って……」
ふらふらしながら、目を覚ました葵がリビングまで歩いてきていた。
誰がどう見ても、家に1人で置いておける状況じゃないのは分かる。学校なんか、行ってられるか。
「バカ寝てろ、あと起きたんなら熱計れ」
薬箱から、体温計を引っ張り出し、葵に手渡す。葵は体温計を脇

に挟むと、その場にしゃがみこんだ。こんなところで起きていても、治るのが遅くなるだけだ。

「インフルエンザ……の季節じゃねぇし。風邪だろうな」

「……冬真？　何して……」

とりあえず歩くのもしんどそうな葵を、持ち上げる。そして2階の葵の部屋まで運ぶ。

「お、下ろして……」

「いいから。たまには俺にもなんかやらせろ」

去年俺が熱出したりしたときも、それ以外に俺が本来1人暮らしならやっていたであろう、家事全般。全て葵1人にやってもらっていた。

今思えば、1年も俺みたいな奴のために、普通にしてたらもっといい男とも一緒になれたと思うが……

とにかくベッドに下ろし、布団をかける。

さて、力でどうにかなるのはここまで。俺はそれ以外のいろいろを、1人でこなさないといけない。主婦ってすげぇんだな。

「料理は……できなくもねぇが……」

俺ができそうで、寝込んでいる葵でも食えそうなもの。そうなると、お粥ぐらいしかないが、病人にはそれが一番だろう。

確かお粥を作るモードが炊飯器にある。それの通りにやればできるだろう……

なんか味付けがないとうまくないよな……シンプルに塩でいいか。
そんで、卵でも入れてみると……どうなるか。

所要時間３０分くらい。葵は寝ちまったかもしれねぇな……
とりあえず部屋に入る。葵は目を開けていた。
「とりあえず、お粥作ってみたんだけど……食べれるか？」
「え？　……ありがと」
「ああー食べる？」
「なに？　……食べちゃまずいの？」
そんなことないんだが、これうまくできてるのかなぁ。味見した感じは、問題なさそうなんだが。
とにかく食べてくれるらしいので、れんげですくって葵の口まで運ぶ。
「自分で食べるよ……恥ずかしいし」
「恥ずかしいじゃねえよ。俺はファミレスでやったってのに」
それを言われると、どうもその通りだ、と理解したようで葵は口を開ける。俺はお粥を口の中に入れる。

今気づいたんだが、これはやる方も緊張するし結構恥ずかしいな。

「ん、おいしい……」

「よかった」

とりあえず高評価をいただけたようで、素直に嬉しい。やっぱり自分で作ったもので喜んでもらえるのは、いいものだな。

それからも、ゆっくりだが葵はお粥を食べてくれて、綺麗に完食してくれた。

「なにか、してほしいこととかあるか？」

「体が、べとべとする……」

「風呂……は無理だからなぁ」

どうしようかなぁ。

いや、まぁ思いつくことはあるんだけど、男の俺がそんなことするわけにもいかないし。でもそれしかないといえばそうなんだが。

俺が寝てたときは、まぁしてもらったわけだが、男の場合とは勝手が違うしなぁ。

「まぁ、仕方ないか。よし、準備する」

「……へ？」

「タオルで体を……」

「じゃあ、タオルだけ用意して……自分で拭くから……」

「そ、そうか」

そりゃその方がいいよな。とりあえず、お湯とタオルを用意しに、俺は一階に降りた。

「持ってきたぞ」

葵の部屋に入り、お湯とタオルを渡した。

そして、とりあえず俺は部屋を出た。

そしてリビングまで降りてきて、何気なしにテレビをつける。ニュースの中の丁度正座占いだ。別に俺は占いとかあまり気にしないが、見ておこう。

俺は8月31日生まれの乙女座だ。夏休みの最後で、俺の誕生日は毎年ドタバタしている。

『今日の12位は乙女座』

朝から最悪な気分だ。

『今日一日、忙しく、さらに何をやっても空回り。自分1人では何をするにもうまくいかないでしょう』

おいおい……

なんだこりゃ、なんか当たりそうじゃねえか。というか忙しいと

いうのは当たってる。

とりあえず自分の朝飯がまだなので、チャンネルを変えてから、残っているお粥を器に入れて、食べ始めることにした。

うん、いい出来だ。料理なんてやってみたら、それっぽくなるもんだな。

「朝だとニュースしかやってねえな」

チャンネルをいろいろ変えてみるが、やはりニュースと分け分からん番組しかない。

俺は基本ニュースは見ないし、新聞も読まないから、朝家にいると本当にやることがない。まあ看病という仕事はあるんだが。

『現場の堀田さーん』

ピッ

『今週一週間のお天気……』

ピッ

『バカとブスこそ東大に行け！』

なぜこんな時間に、再放送を？

まぁいいや。これでも見てよう。

……終わった、これ最後のセリフじゃねぇか。結局見るもんねぇな。

朝って、結構退屈だなぁ。

第１１話：追い出された主人公……

――冬真……

……声が聞こえた、気がする。多分ここは夢の中。なぜなら俺の体が無いから。

何かが消えていってしまう感じがして、俺はとても悲しい気持ちになっている。

――冬真……

また声が聞こえた。けれどもさっきより不鮮明だ、それに別の音が混ざっている。

「あ……やっぱ寝てたか」

俺はテレビをつけっぱなしにしたまま、リビングで椅子に座って寝ていた。よく分からないドラマが流れている。

目をこすると、うっすらと頬に涙の跡があることに気づいた。悲しい夢だったことだけ憶えている。

何の夢だったのかは分からない。でもきっと、俺が見ていたのはあの人なんだ。

もう一年も会えていない、大好きだった姉さんの夢だったはずだ。
多分両親ではない、あんな奴ら夢になんぞ出てこられちゃ困る。

「おはよ、冬真」

「うおっ」

ビックリした……葵も起きてるならそう言えよ、というか俺を起こしてくれてもいいじゃねぇ……

「何してんだ柊、学校は？　つか葵の声真似とかすんなよ」

「永野君、時計が見えないの？」

時計を見てみると時刻は3時半というところだ、どうりでお腹が減るわけだ……
しまった、葵は！？

「大丈夫よ、ただの風邪だし熱も下がってるわ」

「あぁ……悪い」

「それよりも、この状況。よろしくないんじゃないのかしら？」

柊の言っていることの意味が分からなかったが、後ろを見ると、岬姉妹がいた。俺の家に、多分葵のことを心配してきてくれてるんだろうが……
これ、やばいじゃん。ばれてるし。

「なんでいるんだよ！」

「おいおい、遊びに来てる友人にそりゃ無いだろ」
「遊びにって……じゃあ葵とは」
「当然、心配してきたんだからな」
1年隠せてたのに……まぁ無理があったか。
「ビックリしましたよ、一緒に住んでるなんて」
「優那ちゃん……でも一緒に住んでるとはいっても」
「分かってますよ。ほんとに葵ちゃん優しいです、幼馴染なんですよね」
あ、そうか。この子は俺と同じ、幼馴染同士でそんなことがあるわけが無い、と思ってくれているようだ。
そのはずなんだが、若干柊と優那ちゃんの目線がピリピリと痛いのは気のせいだろう。
「でも、ちょっと女の子同士でお話したいので、永野君は外でぶらぶらしていてください」
「は？　なんでだよ」
「なんでもです」
なぜか妙に力強く言われる。普段大人しいだけに、変な感じだ。

柊も「そのほうがいいわね」と、俺に出て行くようにいう。別に女の子だけで話がしたいってなら、それはそれでいいけど。

「別に私は特に話すことねーけど」

「じゃあお姉ちゃんは外でもふらついててください」

「なんで？　なんか2人、私のことどうでもいい扱いしてない？」

「この場においてはそうね……」

「ひでぇ！」

「なんでこんな扱い！？」と、嘆いていると玲那とともに、俺は追い出される感じで家を出た。

「はぁー……暇だ」

「おい、私と2人きりでそれは無いだろ」

そう言われても。別に玲那と2人きりで、いやっほう、とはならねぇよ。

でも一番2人で遊んだ回数が多いのは、女子では玲那かもしれない。当然葵は幼馴染だからもっと多いから、抜いてはいるが。

しかしこいつと一緒に行った場所って、ゲーセン、ボウリング、

なんかバッティングセンターとかにも行ったっけな。ほとんど拓海と変わらねぇな。

「私は、女の子、だよな……？」

「悪い、そうだ、と言い切れねえ」

「それだけは言い切ってくれ！」

「冗談だよ、それよりどうする？　なんか暇潰せそうな場所ないか？」

「そーだな……カラオケでも行く？」

「……お前とか？」

「前にも行ってただろうが！　いいだろ別に」

そりゃ行ったが、２人でカラオケは無かっただろ。

「あー学校休んでるから……」

「今さら？」

確かに今さらだな。

断る理由もないし、カラオケでも行くことになってしまう。

ちょっと街っぽいところまで歩いていくと、カラオケなんかいくらでも見つかる。

拓海でも呼んでやったら、大喜びで来るかもしれないが……やめ

とこ。というか、呼ぶわけにはいかないと言った方がいい……

永野冬真の家にて、柊沙羅、岬優那、そして杉下葵の3人は女の子同士でのお話を始めていた。

「だ、だから。幼馴染なんだから、面倒見てやるのは当然でしょ」

「そうね……でも、2人きりというのは……」

「何もないからっ」

「抜け駆けです……というか、卑怯です」

「優那ちゃんまで……」

状況的には、葵が一方的に2人からの苦情を受けている。
ちなみに苦情の元凶となる男は、現在違う女と2人でカラオケなどに行っていることは、彼女たちの頭に無い。

「卑怯といえば卑怯ね、ただでさえ幼馴染というのは大きなアドバンテージなのに」

「ちょっ、ちょっと待って！　幼馴染だからって、私のこと、ほとんどそういう目で見てないのよ？」

「「そういう目で見られたいの（ですか）？」」

「そ、そういう目って、そういう意味じゃないわよ？」

「「そういう意味って？」」

「あー！　違うからっ！」

「「何が？」」

「今日2人とも変だよ！」

必死で話題から逃げる葵に、だんだん楽しくなってきた2人は、普段はそうでもない優那までもがドS気質を全開にし、自ら墓穴を掘り続ける葵をいじめていた。

しかし葵が言っていることは嘘ではなく、幼馴染ならではの苦労というのもあるのだが、今の彼女たちにそれは関係ない。

とにかく葵をいじめるのに徹していた。

「あ、そういえば玲那ちゃんは今、冬真と2人きりよね……」

「「あ……」」

葵はようやく2人の追撃から逃げることに成功した。

しかしそれは、攻撃対象が変わったというだけのことである。

おかしいな、春なのに寒気が……風邪がうつったか？
まぁいいか。

玲那は、歌を歌っている。そりゃカラオケボックスなんだから当然なんだが、玲那は歌がうまい。
今までも何回か聞いてるが、普通に聞けるくらいにうまい。芸能人歌うまくらいなら、優勝できるんじゃないかというくらいだ。

「うまいうまい」

「そうだろっ？」

「次なに歌うんだ？」

「冬真も歌え」

「いや、俺はのどがちょっとな……」

「なんでカラオケに来たんだよ！」

マイクで殴られそうになる、いや、それシャレにならん。

「おもしろくねーよ、私だけ歌っても」

「そうか？」

「あぁ、お前の歌を聞いて、精一杯笑ってやる」

「……それ言われてから歌うか？」

「歌え」

玲那は俺にマイクを突き出す。俺は仕方が無くそれを受け取る。

俺はしょうがないから、もう、ものすごく不本意ながら俺は曲を選ぶ。

「そういえば、カラオケには何度も来てるけど、冬真の歌聞くのはじめてかも」

「そうかぁ？」

とぼけてみるが、聞いたことなど無いはずだ。なぜなら歌ってないから。

俺は人の歌を聞いてる分にはいいが、誰かの前で歌うのは苦手だ。

というか歌ってないんだ、わざと狙って。

「そうだって絶対、楽しみ」

「やめてくれ」

ほんとにやめてほしい、そして先に言っておく。

俺は多分音痴だ。

その日、カラオケボックスは笑いに包まれた。

第１２話：苦労する主人公

「永野君、歯を食いしばってください」

家に帰ると、いきなり優那ちゃんにこんなことを言われる。

「待て、意味が分からない」

「冬真ー。バットは金属製と木製どっちがいい？」

奥から葵、両手にバットを一本ずつ持っている。

「野球でもするのか葵……待て！　俺の顔はボールじゃない！」

なんでだ？

「永野君……×××のサイズは……」

「待て！　話せば分かるはずだ！　そのウィンウィンいってる危ないものをしまえ！」

あんなもんどこから手に入れたんだ柊は……

というか、俺と玲那が外に出ている間に、この家で何が起きていたんだ？

「いやー笑った笑った。こいつすげー下手くそでさぁ」

俺の後ろから、玲那も家に入ってくる。

カラオケボックスでは散々笑われた。絶対にカラオケなんてもう

行かねぇよ。

今俺は、恥ずかしいという感情と、若干の怒りがあるのだが、今の玲那の一言で、家の中の空気が一気に変わっている。

そんな異変に玲那は多分気づいていない。空気読めないから。

「そ、それは具体的にどういう……」

「いやもう、小さいし、ずれてるし。笑うしかない」

「うっせぇな！」

「「「……」」」

どんどん空気はおかしくなる……というか殺気すら感じる。

いや、殺気しか無い。

「でもあそこまで極めると、逆に気持ちよかったけどな」

「ちっ……でっけぇ声出しやがるから……」

絶対周りの部屋にも状況伝わってたはずだ。

すげぇでかい声で笑いながら「下手くそ！」って連呼してたし。

「待て待て、柊。苦しい、というか待て！　待ってくれ！　受身取れないから！」

俺の声が聞こえないのか、いや聞こえてるよな。

柊の投げ技で、フローリングに叩きつけられた。

い、いてぇ……

「どこで……やってたの……？」

葵が消え入りそうな声で俺に聞いてくる。というかなんだ、そんなに俺の歌で笑いたかったのか、こいつらは？

というか、どこ？　そんなの聞かれても……

「普通にカラオケボックスだけど」

「まぁ、なあ」

「「普通にカラオケボックスなの！？」」

「……なるほど、結構やるのね……」

葵と優那、ありえないことを聞いたというような驚き方をする。でも、他に歌う場所なんてあるか？

あと結構やるとか言われても、俺は歌うのは嫌いだぞ。絶対お前とは行かない。

「まず選曲から悪いのよ、なんであんな難しいのばっかり歌うの？」

「歌ってたの？」

「「はぁ？」」

葵から出た意味不明の質問に、俺と玲那がハモった。カラオケボ

ックスで、歌を歌う以外のことするか？

「いや、そりゃそうだろ」

「なぁ」

「「「っ！」」」

俺と玲那は、至極当然のことを言ったはずなのに、3人は『しまった！』とでもいいうような表情になり、俯いてしまった。

普段はそんなことにはならない柊まで、顔を手で覆ってしまっている。

「やられました……」

「今思えば冬真に……」

「そんなことする度胸は無かったわね……」

なぜか顔を伏せたままの3人の女子に、軽くひどいことを言われる。

もうわけが分からない。なんの度胸が俺には無いんだ？

「そんなことって何だよ」

「ばっ！　バカ！？　女の子にそんなこと……あ！」

語尾がどんどん小さくなっていく、最後のほうは聞き取れなかったが、最後の『あ！』は明らかに言っちゃいけないことを言ってしまった的な意味合いだろ。

しかも最初にはバカときている。

「じゃあ永野君、確認よ。カラオケボックスで歌を歌っていたのね？」

「当たり前だろ」

「そう……」

3人は、安堵の表情を浮かべた。

とりあえず正常に戻ったらしい3人、とりあえずは良かった。

葵の体調もかなり良くなっているみたいだ。服も着替えている。

なんかリビングからは良い匂いがする。

「もしかして晩飯か？」

「もしかしなくても晩御飯よ、優那ちゃんと沙羅ちゃんも手伝ってくれたのよ」

「へぇーありがたいな」

女の子3人、一緒に晩御飯の準備をする。なんとも微笑ましい状況のはずなんだが、俺にはなぜか火花が飛び散っている、三つ巴の状況に感じられる。

テーブルの上には豪華な、ほんと豪華すぎる料理の数々。今日って何か記念日だったか？　というかよく北京ダックなんて作ったな……

「ほんとすげぇな……」
「そうでしょ！　このピザは私が焼いたのよ」
「スパゲッティは私です……」
「北京ダックとかこのマグロの兜とかは柊だろ？」
「……なぜ分かるの？」
いや、お前しか考えられねぇよ。そりゃ凄いけど。
材料とかどうやって確保してきたんだろう……ていうかよくうちのキッチンでマグロの兜なんて調理できたな。
まぁ細かい事は良いや、それが柊なのは去年1年で十分理解してるしな。
とりあえずいただこう。
5人でテーブルを囲む形になる。
「誰もが羨ましがる状況だと思わない……？」
「そうだな、すげぇうまそうだ」
「……」
なんでそんな目で俺を見るんだ柊。
「あーあ、料理なんて作るんなら私も手伝ったのに」

「ダメですよお姉ちゃん」

「なんでよ、私も結構料理得意よ？」

「だからですよ」

仲の良い姉妹？　だよな……

しかしここに玲那も加わってたら、この人数でも食いきれるか謎だな。

いや待て、この人数で、この量を食いきるのは無理じゃないか？

「永野君、はい、あーん……」

「待て待て柊、マグロの兜丸ごと突き出されても困る」

「それぐらいしないと、余るわよ」

「分かってる、というか分かってるなら考えて作れよ！」

「夢中だったんだから仕方が無い」

そう言われても、夢中で作っても食べ切れなかった意味ないだろ。

それとこのマグロいつになったら下ろしてくれるんだ？　俺はいつまでマグロと向き合っていればいいんだ？　これはもうかじりつけということなのか？

……しょうがない、かじることにしよう。

「おっ、味がしっかりついててうまい」
「でしょう？　じゃあ後は丸ごと……」
「それは無理だ」
仕方ないという風に柊はマグロの兜を置いて、箸でつつき始めた。
俺にもそうやって食わせて欲しかった。
「冬真！　ピザ食べる？　ピザ！」
「食べる食べる……なんかいつもに増してテンション高くなってるな」
「そ、そんなことないけどっ！？」
そんなことありすぎだ。何年も一緒にいなくても分かる浮かれようだよ。
やっぱり、人数が多いと楽しいよな。
顔の前にピザ、とりあえず一口。
チーズの量が半端じゃない。うんうまい。
「どう？」
「すげぇうまい」
「よかった！」
「じゃ、じゃあ私の……スパゲッティどうぞ」

「ありがと」

フォークに丁寧にクルクル巻いて、俺の顔の前に持ってきてくれる。

一口でいただく。うん、これもうまい。

「どうですか……？」

「うん、うまいよ」

「よかったぁ……」

「じゃあ私の北京ダックを……」

「それはやめてくれ、自分で食うから」

北京ダックにかじりつくのはちょっと無理がある……

「じゃあ私のこれを」

「いえ、まず私の……」

「ワニを……」

「そんなに出されても困る……というか柊！　ワニってどっから持ってきたんだよ！」

どうやってそんなもんを……しかし味は案外いけた。

「ははは！　なんか冬真さぁ、餌付けされてるみたいだな！」
「餌付けぇ？　そんなわけねぇだろ」
「そうよ、ただ純粋に楽しんでるのよ」
それもどうかと思う発言ではあるぞ。
「……しかし、量が多いね。なんでだろ……」
優那ちゃんの素朴な疑問、しかし答えは明らかだ。
「まぁワニとマグロと北京ダックだと思うが」
「私が悪いと？」
「悪くはねぇが……」
ある意味人の家にマグロ一匹、ワニ一匹、そしてアヒル一羽を料理のためとはいえ持ってくるのは悪いことかもしれないけど。
キッチンには……ワニがいるのだろうか……
「いくらなんでもワニもマグロも丸ごと持ってきてなんて無いわよ？」
俺の心読まれた？
「そうなのか？」
「そうなのか？　って、当たり前でしょう？」

「まぁ……常識を考えればそうだな」

「でしょ」

柊のことを非常識だと考えていた俺って間違ってるのか？

「あぁー！　お腹いっぱい」

「葵もう食えないのか」

「男の冬真ががんばってよね。あんたのために作ったんだから」

無茶言うな、これ全部を集めたら多分俺の体よりでかいぞ？

物理的に胃袋に入らねぇよ。ギャル曽根でも無理だろ。

「私ももう、食べられません……」

「私も無理ー」

「姉妹揃ってギブかよ」

「体の構造近いのよ」

そうだろうか。

こうなると俺と柊ががんばるしかねぇかなぁ……

「じゃあ私もそろそろ……」

「じゃあって何だ！　お前全然余裕そうじゃねぇか」

「私も女の子……」

「とは言っても、この量を1人では……」

具体的にはマグロの兜半分以上に、八宝菜がでかい皿に盛ってあるもの。そして寿司、結構な数。あとサラダはかなり減ってるがまだ残っている。そしてワニ、北京ダックが半分くらいなどｅｔｃ……

無理！

なんだけど、作ってもらって食わないってのも……なぁ。

――その日俺は限界を見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8704i/

ハートフル、ファニーライフ

2010年11月16日10時43分発行